

214



特
4429
1

三十年後

星一廿七

未
 來
 文
 明
 の
 七
 景
 説
 話
 新
 三十年後

昭和十年
五月九日
購求

2号
三十年後

小説 文明の真髓

日星一著

偉人帰る。珍客来る。どの新聞も8頁
標題の大浴字を見ざるは無し。人の住める所
は導の出づるは有らぬ。

一行 以下同ト
一行 以下同ト
一行 以下同ト

東京湾 横浜 港の完結
珍客 外國人の赤毛布
女正へ 樹子その方政事家
旅客は 空中 貸物 貸物 貸物

一文字 以下同ト
以下同ト

全ページ 美しくはワケの中を組む

天地及西脇
餘白を
多く取る



キクオチ

五号ポイント
十行 三〇〇字
二行 三十五字

校正は
見本を要す

再校までよろし

存下品川 南品川
三品川 江見水陰

207	
464	
000	
000	
000	
004	
208	400
420	0019
3970	
40	38
12	14
370	

□ 東京新港。第一橋樑は、其珍客を載
せし船の着くのを待構へて、黒山くろやまの如き人出
がしてなる。それが皆に之を其評判。

□ 恰度今より三十年前でした。其時、今
の橋と珍客があれやうです。其時東京新港
が市は至るに無いたるに、出立を居る頃です。
それの横濱へ着いたのでせう。ハーデーといふ
いふ老水夫で、米國のバルリ提督を往る事あり
の六十年振りで又来たのです。それの日

新

本の進歩を見て驚き且つ喜んむといふ事では
す。私等は、其の生れを居たつたのを、
其時の事情を能く知りせんが、今日帰つて来
る侍人は、先づハーデー以来の珍客と云ふ好
いでも、一人の紳士は同伴者として語り掛けた。
曰、そのハーデーは六十年目です。其の
で、今度の珍客は三十年目です。いえ、
珍客といふのは、水島いりて、今、同日
本人さんです。其の、三十年も本國で、其の
て居たのをす。珍客扱ひを愛けたり、仕據

有りすすまひ。それがです。ア、明治初年頃の一年
 と頃(一六〇年)の一年とは、変化が激甚です。三十年と
 は云つても、ハーデーが六十年間の進歩が、驚き
 以上だろと思ひます。あゝ、どうも頃
 日本(一八七〇年)の文明は、お正子生れん致とぞ、
 くで、ア、ア、ア、と同伴者は答へてゐる。
 □ 此所へ、外國人の赤毛布が新に入つて来た。
 昔は田舎の赤毛布を、見ると、
 今では都會の地方も平均に、
 新

ので、赤毛布の赤毛布は見る事
 出来ぬ。第一、赤毛布とは意味が、
 今(一八七〇年)の頃。古い辭書で引いて見ると、
 其起源が、
 □ それで、昔の赤毛布は、
 國々の觀光客で、日本、
 □ 今、二紳士の間に、
 話も、可成り巧み遣つて

日 ぶ人か帰る来るのをすか... と問掛

明治の... 大正へ掛りて、朝野共々人

大政事家、島南太郎... 人か有

南洋の無人島... 隠匿す

惜んで種を帰国する... 手

今を患うて見ます... 何しり

徳ひをせん... 島南太郎が三十

年振る今日帰る... 竹をえす

甲の紳士は説明せん

三十年の経路... 本國が

可慕しく成る... 見え見え

外國の赤毛布氏... 獨合点をせん

然るでは無い... 島南太郎は

何時まで... その無人島は

竹をえす... その竹を

乙の紳士... 竹を

打情... 竹を

竹を... 竹を

竹を... 竹を

竹を... 竹を

竹を... 竹を

竹を... 竹を

海は 太っカリ 濁いて 居る 護り は 参りませ
 んふ 世所 ^{イタクラ} 強備の 嶋浦 ^{わたり} せ所 ^{一住んで}
 日本 ^{日本の} 商船 ^{島丸} 島丸 ^ら 羽 ^を 無理 ^に 載せて
 兎 ^下 角 ^{日本} 日本 ^へ 帰 ^{つて} は 斃 ^ふ さい ^{餘程} それ ^は
 喜 ^ぶ つて 居 ^り ます ^る 貴 ^様 箱 ^が も ^シ 三 ^十 年 ^前 国 ^を
 民 ^の 陸 ^と 落 ^を 憤 ^り ます ^る 確 ^は 上 ^は 一 ^身 ^を 潔 ^く
 く ^な す ^と い ^ふ 皆 ^々 へ ^は 無 ^人 嶋 ^の 孤 ^独 生 ^活
 を 成 ^さ づ ^け る ^の と ^し て 兎 ^は 毎 ^日 今 ^日 で
 は ^世 心 ^配 ^は 何 ^れ だ ^と 思 ^ひ ます ^か ^ま かり

第

立て ぐり 食 ^つ れ ^の せ ^す の ^也
 日 ち ^ん ぶ ^平 凡 ^ぶ 事 ^情 ^は 無 ^い の ^も 嶋 ^す
 の 全 ^部 ^が 消 ^滅 ^し ま ^る づ ^れ の ^也 ^す
 日 嶋 ^の 全 ^部 ^が 消 ^滅 ^し ま ^る ?
 日 海 ^底 ^の 噴 ^き 出 ^る 作 ^用 ^を 近 ^代 ^の 出 ^来 ^た 嶋 ^が
 れ ^の せ ^す が [、] それ ^が 噴 ^き 出 ^る 又 ^噴 出 ^る の 関 ^係 ^を 海 ^中
 中 ^の 噴 ^き 出 ^る 噴 ^き 出 ^る ^し ま ^る づ ^れ ^の せ ^す ^に 已 ^ま
 れ ^ば は ^イ ク ^ラ 強 ^備 の 嶋 ^浦 ^を 世 ^所 ^に 住 ^{んで}
 告 ^る 事 ^を ^い せ ^ま せ ^ん ぬ
 日 ^も 知 ^ら ず ^は 海 ^島 ^を 無 ^い 限 ^り ^に 同 ^じ 緯 ^度 の

大正三十七年度の日本を片見物あさつて、
 それでも片見物入りきせんぞし、再び地
 の無人島へ片見物あさつて、
 漸く説話の船へ乗して、
 句は、片見物、それでは、
 先船で旅行する人は、
 飛出の船は、
 海路も、
 しんや、そんな珍らしい人が、
 米國への土産を見物、

□ どうして、日本語は巧いのか

4
 品
 記者團の活動振一変、
 露骨で無い、
 唯一人の筆客、
 禁止、
 最新の家は不老、

□ 一方、又新聞記者の「團」が、
 合つて、

日どうも空中に、
 海上からの客を、
 記者が、

新

~~speed~~
~~landscape~~

世人のあつたを若くは敬徳の時、既に無
 電流が通じても、本社の方針部で心付くと書
 了ふりやうな山と C 記者の述懐的の言葉を
 今目では、大抵海底を潜航して来た空
 如、機橋の側へホッカリ浮上るの代り、あ
 借は今は指示板へ海底潜行の距離と時間
 とを電氣化して、刻々指示する機は成る
 と申す
 田 あるいは、原形を鏡で海底の陸上を水も

日 船がぬえ、汽船訪問して借さんお初め
 の経験が、大正初年頃は、大抵機橋を
 けて入港するのを待たせ、機橋の下はドシ
 諾諾と聞かぬで、さういふのが随分無遠慮な
 遣方を、久振で洋行して帰つて来て可慕
 妻子や、兄や種々親しく人達と話して思
 つつ、却つて口を利かぬ程に、記者團の
 團員も、さういふと B 記者の答へ
 日 あるいは、原形を鏡で海底の陸上を水も
 さういふ。それを見ても今は進んでい
 新

見得るべく、今、特殊の反射鏡で海底航行の状態で、今の取組むべく、なされる機が成るのでは、決して遠い事には有るまいと、思ふ。

□ 待つ間の魚群話は、今、草子同トである。

□ 世間、魚群の着港の時間の事。一分一秒、

□ 第一、林檎の中央部、忽然として一方の船が

□ 海面に出現して、機を成つた。

□ 検査？、そんな事は、早く、停止させる。

□ 無容は、直ぐ下航して、好いのである。世無容

新

と云つた事を、唯一人、崎南を航行し、しが乗つ

て、崎南の事である。

日本に到着した。

□

崎南

は三十年振りに

日本に到着した。

船内下知

つて、海面を航行して入港したので

が、その変化、あんなに、少くも、

い、川、川、どの、埋立地、変つて、

それを、知る、機、機、多量、の、

お、お、何、何、誰、誰、送、送、

や、ア、何、何、誰、誰、送、送、

□
 曲の 気味の 腰、その 弾集は 見て、いふ 物
 珍しく 感じる。 股靴の 旧式は 少
 驚かす 老人 振が 黒様 赤の 眼
 を 瞠視 してある。
 句
 あゆが 大正 幼年 頃の 老人 だ
 りで ます。 今頃 あんた 白髪 大
 は 兎 しょう ね。 そ 見ても ぬき せん です。 九十
 あんた せし が 簪 する 年 を 馬り 思 ぎ て 居
 ます。

人 出が しゃるる の 山と 口 走 った。
 口 山 貴公 相と 飲 した 参 った の を 存 り 寺
 山 と 船 長 は 説明 した。
 口 あり、 秘 蔵 を 飲 した。 山
 口 貴公 相 が 無人 島 へ 入 った。 山
 山 は 船 出 した。 山 能く 煙 花 を 打 掃 した。
 山 だ。 煙 花 は 空 中 の 煙 草 が 類 集 した 成 り 果 った
 の だ。 煙 花 は 村 止 った。 山
 口 電 線 が 多く 傾 いた。 山
 山 は 掃 げ させ たら った。 山 現 在 山
 山

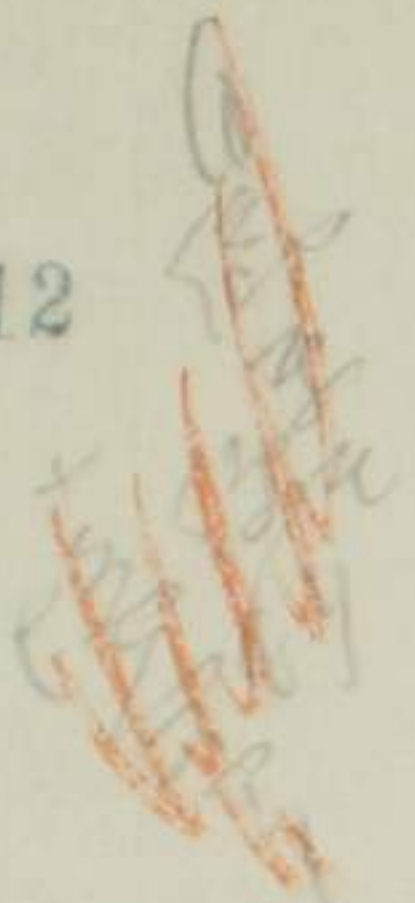
旧思、頼下るの正は、時を歩在ます。どう
 か私の心へ、市東の馬を願ひしめて……
 日、あつ君は然す。三浦中助君の合意か
 ぶ。然らば、それ無くと年齢が合はぬ。克く
 似て居る。着い時、中助君は如何に
 日、いえ、私が合意。その三浦中助です
 日、馬無事奉も、云ひ給へ。三十年前、砂浜
 時、三浦君は三十六七也。シテ見よ、今は六
 十六七であければ、成るやいな
 日、その言、言ふ者、くつ居るは、日本の

新

可、何々々々、國家です。生きた國家が、清の
 て来りし。万々歳を唱へます。山
 日、皆に、万々歳を唱へた。
 日、世群集の中、花の如き、今、鏡の手を取る
 一人の紳士、出現して、馬本道、新
 日、マア先生、能くお帰り下さる。私は三
 浦中助です。と名乗り、掛けた。
 日、え、三浦中助？ と、公卿は、懐印を認めた。
 日、無線電信で、中へかけて置き、通る。

は 崎浦太郎、享年九十一歳、老年は健康
 あり、自覚するつもりで帰る、あんなのわが……
 様子では長命者が多いわが……
 先生、知つた方は、あか澤山、存命です
 百二十五歳まで生きると云つて、頑張つてゐるわ
 ね、古階さん、如何に、出さぬ
 存外、短命なわ、それ、百六歳まで
 生きてゐるわ、わが……
 け——然るわ、わが……
 □ 以、総論は、早々、無線電話で、各新聞社へ、通報

大文明が、せんが、大産翁です。いや、その譯を
 今、お話申しては、居るわ、せん。矢、下、角、どう
 かの、家、入、市、出、を、願、ひ、な、す。これが、私の、孫、娘
 の、春、枝、で、在、り、す。
 □ 花、の、御、中、會、儀、の、春、枝、は、公、翁、の、前、に、美、々、
 花、束、を、捧、げ、る。
 □ 公、翁、は、喜、ん、で、そ、れ、を、受、取、り、の、ち、の、ち、
 日、三、十、年、振、で、湯、朝、の、最、初、の、印、象、と、す
 然、老、人、と、成、つ、て、ゐ、る、々、々、人、の、少、く、な、り、ま、す、と、お、お、
 若、々、と、生、存、し、て、ゐ、る、の、は、驚、き、の、極、み、で、す。



日 電柱に衝突したりしてはるゝ心もふア併
 し車甚の粉は難多の事でもねと云は
 問られ 能程これに進めを告さるついで之
 つれつであらう。
 日 也、自動車は只今では僅かに五六甚しく
 東京には存在せん
 日 五ツ 五六甚しく
 日 其中の漸く一甚く探し出つて来る
 唯今では方概 既行機を用ゐる事よ
 自動車は必用がズツと減じりて
 日

さびてゐる。記者の色園するゆりは月をさね
 め小機械が簡單な搭えられ此中よりその心

三

一 自動車は既に發達し精神界も亦大變
 化し湯朝第一を行くべき處に漸く探し出
 され運轉す古色蒼然と大行列と
 云ふは概し一明治神事と正知年と時代錯誤

日 事先と自動車へ馬車の下さへしと
 三浦中助は翁の手を引いて機橋へ降りると云
 づ。
 日 自動車、こればかりは癡りが無いと見え
 三十年前と同様に相違りなく人を轉送し

日 ぶあ ——— とおは 鳴りしつゝ
 日 急い空の中を 時運の車として 今ふいと 存
 じまへし、それと 踏切機と 金中の市街
 の変化 あんが 時運の 向は 奇せんと思ひま
 て、あふ 擧げて 夢つれのをす
 日 自動船が 流りしつゝ、江戸の 名残
 の 屋根が 漸く 一隻の 成つた、話も 思
 合はれ、今は 自動車の 時代には 無
 ぶあ、併し、変化の 変化は 強想せん
 日 物質上の 変化は 有り得る 事か
 ぶあ
 日 昔は、先づ、そんな 事どころには 有りせん
 物質上の 変化は 有りせん、精神界も 奇
 化は 有りせんが、チヤ 矢、角、一層 定まる
 日 いか 私は 直ぐ、行く 処がある、然る 云へば 君
 日 今朝 第一は 行く ところ、成らん
 日 二車 橋下 市在、
 日 第一は 白王 城、
 日 折さぬ 成

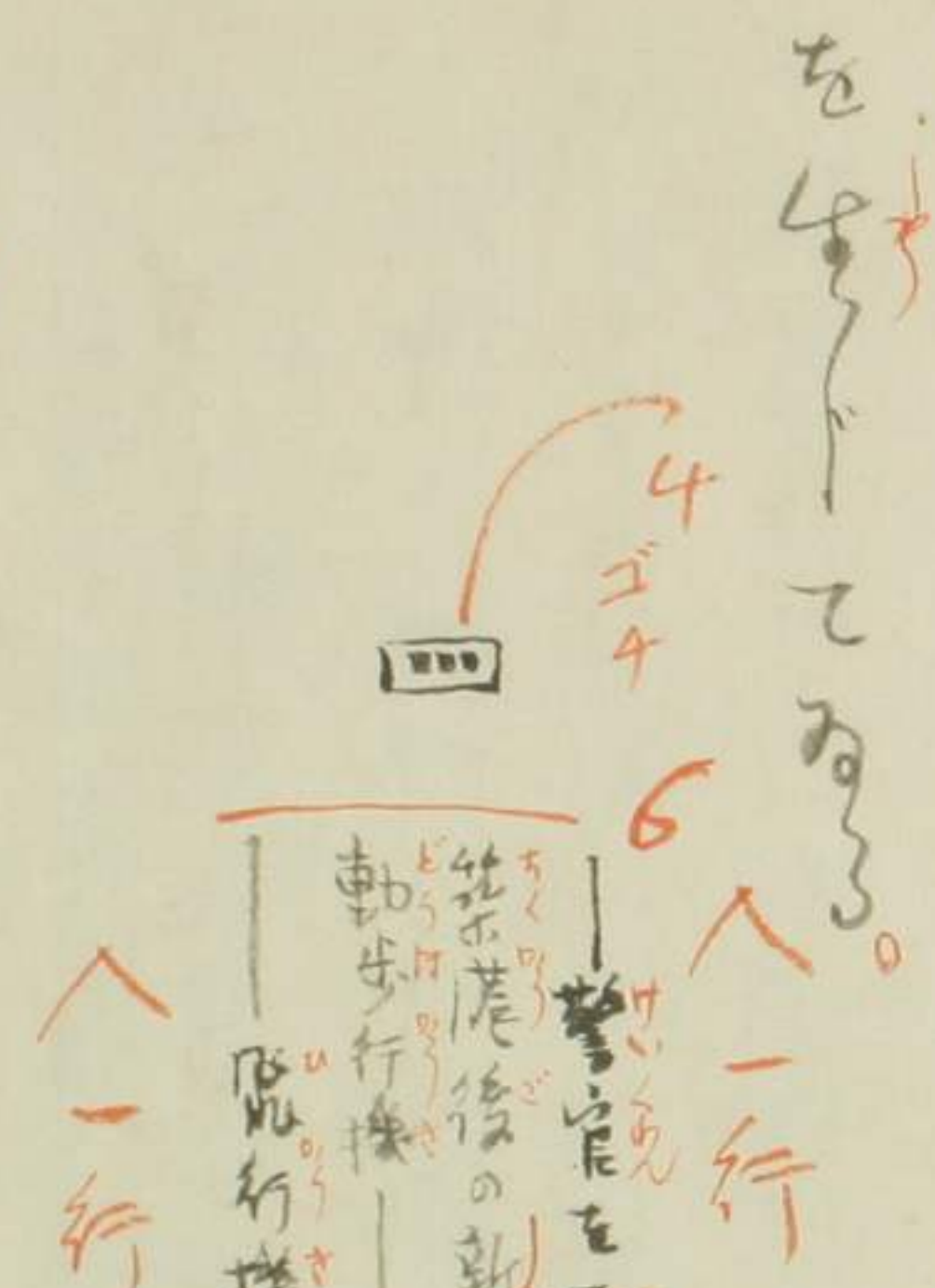
日 ぶあ ——— とおは 鳴りしつゝ
 日 急い空の中を 時運の車として 今ふいと 存
 じまへし、それと 踏切機と 金中の市街
 の変化 あんが 時運の 向は 奇せんと思ひま
 て、あふ 擧げて 夢つれのをす
 日 自動船が 流りしつゝ、江戸の 名残
 の 屋根が 漸く 一隻の 成つた、話も 思
 合はれ、今は 自動車の 時代には 無
 ぶあ、併し、変化の 変化は 強想せん
 日 物質上の 変化は 有り得る 事か
 ぶあ
 日 昔は、先づ、そんな 事どころには 有りせん
 物質上の 変化は 有りせん、精神界も 奇
 化は 有りせんが、チヤ 矢、角、一層 定まる
 日 いか 私は 直ぐ、行く 処がある、然る 云へば 君
 日 今朝 第一は 行く ところ、成らん
 日 二車 橋下 市在、
 日 第一は 白王 城、
 日 折さぬ 成

田
おらう明治神宮
出立上つたのやめ

日 多分先生は然る御有る事と存じます
 宅では用意がと申在ります
 日 何用意？
 日 一層は宅へお着きの上、身を清め、服を
 改め、お上下二重袴へ入る。と云う事と世準
 備が致し申在ります
 日 おう世準を考へて居て居る。人が
 日 ~~あ~~結構に
 日 先生は何も御有る事。現在では少し大

さふ旅行を致し申すものは、行きと帰りとも
 は世準二重袴へ入り申す。皇城を伏拝す
 ます。また明治神宮へお参り致し申す
 日 ~~それ~~世勤王の心、大深原より征つて
 人間の生命も健全である。私が三十年の無人
 地生活も、ついに廣大無自選の市稜威に依
 日 ~~す~~ア何の先生、自動車は片乗り下さいます
 し。私も久々で乗ります。花枝ちゃん、今日おめ
 て乗ります。と云う。

杯ねぬと橋浦翁は自動車のおもむきで道をゆく
 のをすよと花村如葉が説明せん



警察官を要せず——群集自ら秩序を保つ——
 築港後の新市街——市保の街に結入るる銀座通り——
 軌歩行機——市保の街に結入るる銀座通り——
 既行機の見降場——お客様は屋上より——

をゆつてみる。

□ 運轉手は漸く探して得た位である。
 □ 自動車は忽ち動き出した。
 □ 見物は笑聲やう鳴まわすを浴せ掛けた。
 □ 甲の見物。
 □ 趣向です。ア。珍客を自動車に乗る
 □ したのは、古色蒼然たる処が調和して居るを
 □ 社の着せ、馬の乗る、大名行列と云
 □ 既に明治初年と大正初年との時代錯誤

日 此所は赤松港後の新市街ですと三
 日 本がぐらと暮らへん
 日 ぐらと暮らへんは汐干は目を拾り来
 日 ねんあんわふ
 日 けいけいの上總澤通と申しませう
 日 ぐらと暮らへんは出たのがあ
 日 赤松港のや自動車は速力はワザ
 日 緩めを歩在する
 日 ぐら三浦君新聞の町は猶更で将来
 日 膨張を豫想して道幅でも何んぞとちき

平

日 ありわけの群集が併し少しも動揺しよ
 いぬ。見ればお騒がせに一向居ない様だ。能く
 日 せんちの秩序が保たれたるです
 日 警備官？と仰有いますと、あの昔の警備部
 日 の巡査と申しませう、それを歩在する
 日 それ昔の今居りませんか
 日 せんちの秩序は必用が歩在する群集が銘々
 日 秩序を維持して居りませんか
 日 日一其所を文明は成りませんか、それ
 日 難有い……地が思つたより町が漸くいふ

く取らざる置かざれば成らぬとは無^いの^う
 日^ひ 其^{その}の^の 自^じ動^{どう}車^{しゃ}や馬^ば車^{しゃ}や人^{ひと}の^の 無^無量^{りやう}の^の 運^{うん}搬^{はん}機^き関^{かん}が^が減^へり^して^いく^はる^はす^す。人^{ひと}の^の 一^{ひと}人^{ひと}の^の 二^{ふた}
 人^{にん} 兼^{かね} 二^に 有^ある^るの^の せ^せ、自^じ動^{どう}車^{しゃ}や馬^ば車^{しゃ}は^は相^あ当^あ当^あ
 幅^はを^を取^とり^ます。それ^{それ}が^が 津^つ山^{さん} 探^{たん}査^さ場^ば合^あは^は
 道^{みち}幅^はは^はイ^いッ^ッテ^テ 廣^{ひろ}く^くツ^ツと^と 是^{こゝ}の^の 道^{みち}幅^はは^は有^あり
 ま^ません。道^{みち}路^ろの^の 擴^{かく}張^{ちやう}は^は 知^しら^ら 市^しの^の 擴^{かく}張^{ちやう}を^を 従^{したが}ふ
 無^む駄^だの^の 距^{きょ}離^りを^を 生^なじ^じ 鐘^{かね}針^ねの^の 時^{とき}間^{かん}を^を 要^よす^す 譯^{わけ}
 せ^せる^る、大^{だい}正^{しやう} 幼^{じゆう}年^{ねん} 頃^{ころ}は^は 隨^{したが}分^{ぶん} 送^{そう}込^こを^を 相^あ
 互^{たが}に^に 感^{かん}づ^づき^き 各^{おの}々^{おの}々^々 各^{おの}々^{おの}々^々 の^の 道^{みち}幅^はを^を 保^{たも}つ^つ 例^{れい}の^の 空^{くう}中^{ちゆう}道^{だう}

路^ろの^の 開^{ひら}け^けを^を 上^あげ^げ、地^ち下^か鉄^{てつ}道^{だう}を^を 發^は達^{たつ}し^しま^ます
 し。普^ふ通^{つう}の^の 用^{よう}向^{ちやう}は^は 自^じ動^{どう}車^{しゃ} 歩^ほ行^{こう}機^きと^と云^いふ^ふ 靴^{くつ}や^や下^げ駄^だは
 仕^し掛^{かけ}の^の 有^ある^る 物^{もの}を^を 売^うり^り 買^かい^いて^て 歩^あり^り 交^かわ^わる^る の^の 道^{みち}幅^はを^を 保^{たも}つ^つ
 可^か 也^や、其^{その}の^の 電^{でん}車^{しゃ}も^も 見^みえ^え ず^ず 一^{ひと}人^{ひと}の^の 電^{でん}線^{せん}が^が 引^ひ張^{ちやう}つ^つ 有^ある^る 途^と中^{ちゆう}
 線^{せん}が^が 一^{ひと}本^{ぽん}も^も 見^みえ^え ず^ず、い^いふ^ふ 途^と中^{ちゆう} 地^ち下^か鉄^{てつ}道^{だう}を^を 開^{ひら}く^く
 れ^れと^と 見^みえ^え ず^ず、其^{その}の^の 途^と中^{ちゆう} 其^{その}の^の 位^{くらい} 不^ふ愉^ゆ快^{かい} 有^ある^る 途^と中^{ちゆう}
 無^む駄^だの^の 用^{よう}向^{ちやう}は^は 自^じ動^{どう}車^{しゃ} 歩^ほ行^{こう}機^きと^と云^いふ^ふ 靴^{くつ}や^や下^げ駄^だは
 どの^{どの} 街^{まち}の^の 羊^{ひつ}不^ふ觀^{くわん}を^を 守^{まも}り^り 其^{その}の^の 道^{みち}幅^はを^を 保^{たも}つ^つ 途^と中^{ちゆう}
 の^の 道^{みち}幅^はを^を 保^{たも}つ^つ 途^と中^{ちゆう}
 □ 花^け枝^え 燦^{さん}は^は 羽^はに^に 注^{ちゆう}意^いを^を 集^あめ^めて^て

ワ ヤツと新橋へ参りませぬ

三浦中助

ワ これの銀座通は成りませぬと告げぬ。

ワ 成程銀座通……だが一向昔と異なる

あいな。三十年前と同下

ワ 高きとい様は市下どの位力を盡して居るの知れせん

ワ 之の神田の眼鏡

ワ 伊豆の保善街に編入され居りませぬ

ワ 總て昔の儘で有る様も却と備へ

規則が出来ませぬ

ワ はーそれは如何に高へ氣が着いて居る。因

家として古建築物を保護して法隆寺の

春日社 回廊としてその出入りませぬ

事、成つて居るが、日本最初の東京家畜

西條屋市街の元組は銀座並に地味に市が

保護して永久に傳へ様と旨い

ワ ですから、此れが有りませぬ。風俗が有り

す。元通の建築を以て補充する様

下成るに居りませぬ

ワ 此れを以て一番見事な所と成るに居る

三浦中印と云言茶を添え也。
 嬢は若る人れ。
 あれは目生知花燕 株式会社ですと花枝

集つてあるが……と
 樹けん
 京橋？ 成程 系橋が 昔の通りだ。おや
 橋を渡りて 左側、下層又人が
 集つてあるが……と
 山と島浦は花村様と問

五
 一行
 記憶すべき會社——文明の真髓の茶を
 た賣——聖跡指ひくくる——高塔と
 ころの國まで七びんを——故の
 葉の力——若い若人——割と古けれ合息！

花梅嬢は再び泣き……
 先生、此所は京橋を片在ます

滑走せしむる道々 船の機は日勝しすすの心
 大概の上 場を有して信りす。です
 下お家様は雲の 屋上 天降つて来る
 降場を有して……家は一軒も有りませへ
 又ツ 船の機を倉上へ……

ので……
 文明の真髓は抑々彼の会社から出たので
 有りき、今下は彼等を聖蹟扱ひする
 有る者も有りき
 曰く、それは如何いふ譯で……
 曰く、それは如何いふ譯で……
 願つて置きたるを、日本の大文明を説明
 する事が不可能です

先生も片断の終です
 や、目録新報株式会社に能く知つて
 かの群像は如何いふ
 地方の事を述べた人の話の終
 社会の昔々の建設を見れば、又工場は別
 ので、實際の事務を雨に及、又工場は別
 した、その終り、や、その終り、先生、女の
 有様も能く片断を願つて置きたるは、日
 本、三十年間、大進歩を遂げ、いふ事は、
 就て、あの会社が、大進歩を遂げて居ります

三浦は答へぬ
 世界の大乱で後進と戦争中
 革命が起ると無政府状態の陥る混乱
 混乱を幸ひて居る時私は無
 嶋へ渡ると總ての通信を断絶して居る
 で何んとも様子は居らぬが露國は到
 頭亡びぬ
 いえ救はれず
 英④が救つた米④が政つたか
 日本が……

カサツキはイケない
 日本は本気で歩在す
 然るに三つ居る間、早や神田を居る
 ニコライの高塔が見えぬが……
 とは料は不審を打ち
 女の建築は三十年や五十年をビルと
 なるのは海に鉄骨が如何なるか
 塔は此では歩在す
 露西軍と
 海に成り掛けたるを先生は居る
 問

~~均一~~
~~...~~
~~...~~

□ □ 玄關には 令息夫婦 其他の...
 □ □ 先づ 應接室に 通して 内水廻りの人々
 一々 紹介された。
 □ □ とうとう 警備が...
 □ □ の 奥さんと...
 □ □ 三十一年前...
 □ □ 成る...
 □ □ であけ...
 □ □ け...
 □ □ かに...

□ □ 既ら 定へ着き...
 □ □ 派手門構へ...
 □ □ 既ら 定へ着き...
 □ □ 派手門構へ...
 □ □ 既ら 定へ着き...
 □ □ 派手門構へ...
 □ □ 既ら 定へ着き...
 □ □ 派手門構へ...

□ 公羽は何の四の料理と皆さ味い
 四 ヤア三浦君(三浦君)言ん事(こと)を云つては其(其)心(こころ)を
 化(く)れど、内輪(うちわ)が(が)無(な)い(い)事(こと)を云(い)ふ(ふ)が、私(わたくし)が陰脛(いんぎん)
 当時(たうじ)は、君(きみ)は名代(なしろ)の復之(たがひ)で、四方(よしかた)八(やっ)方(かた)借(か)金(かね)

□ 皇城(みやこ)参拜(さんぱい)の帰(かへ)りて、来(き)ぬ(ぬ)鳥(とり)浦(うら)公羽(こうは)を取(と)り
 三浦(さんぷ)家の(け)倉(くら)下(した)は、家(いへ)庭(にわ)的(てき)晩(ばん)餐(さん)會(かい)が開(ひら)か
 れ。

品(しん) 一行(いっけい)
 一(いっ)食(じき)之(の)オ(オ)ーソ(ソ)リ(リ)ケ(ケ)ー(ー)今(いま)下(した)も成(な)全(ぜん)と
 いふ言(こと)葉(は)が、一(いっ)富(とみ)の平(へい)均(ぐん)古(こ)い流(りゅう)行(ぎょう)証(しょう)の
 脱(だつ)線(せん)一(いっ)庫(こ)禮(れい)の敷(しき)込(こ)は、癩(れい)止(し)一(いっ)知(ち)識(し)の結(むす)之(の)を
 補(おぎ)えしと一(いっ)羅(ら)問(もん)の料(りょう)と早(はや)く歸(かへ)いて一(いっ)
 明治(めいし)神(かみ)官(くわん)参(さん)詣(ぎ)子(こ)廻(まわ)る(る) 一行(いっけい)

新

□ 此(こ)れ(れ)も先(ま)づ水(みづ)で身(み)を洗(あ)らめ、股(もも)を女(に)代(しろ)の
 綿(わた)疋(ぢ)子(こ)の疋(ぢ)子(こ)を、再(また)び自(じ)動(どう)車(しゃ)を弄(も)る(る)し、
 二(に)重(かさ)橋(はし)と白(しろ)城(じやう)を拵(しら)すべくとせを
 □ それを濟(す)すさふけは、中(な)か(なか)に落(お)ちて話(わ)が
 せき(せき)あ(あ)ら(ら)ま(ま)あ(あ)る(る)。

□ 此(こ)れ(れ)も先(ま)づ水(みづ)で身(み)を洗(あ)らめ、股(もも)を女(に)代(しろ)の
 綿(わた)疋(ぢ)子(こ)の疋(ぢ)子(こ)を、再(また)び自(じ)動(どう)車(しゃ)を弄(も)る(る)し、
 二(に)重(かさ)橋(はし)と白(しろ)城(じやう)を拵(しら)すべくとせを
 □ それを濟(す)すさふけは、中(な)か(なか)に落(お)ちて話(わ)が
 せき(せき)あ(あ)ら(ら)ま(ま)あ(あ)る(る)。

□ 此(こ)れ(れ)も先(ま)づ水(みづ)で身(み)を洗(あ)らめ、股(もも)を女(に)代(しろ)の
 綿(わた)疋(ぢ)子(こ)の疋(ぢ)子(こ)を、再(また)び自(じ)動(どう)車(しゃ)を弄(も)る(る)し、
 二(に)重(かさ)橋(はし)と白(しろ)城(じやう)を拵(しら)すべくとせを
 □ それを濟(す)すさふけは、中(な)か(なか)に落(お)ちて話(わ)が
 せき(せき)あ(あ)ら(ら)ま(ま)あ(あ)る(る)。

先生
 先生、その為に遠くまで
 三浦中助は在外
 遺録等陰に
 見掛程、アアおつて
 遺録等陰に
 暮らして居るの事
 口は、おとめ、おとめ、おとめ
 今では私任の生活
 之も、貧乏者、そんな事有りませ


知るは、年中、
 魚、その故、貧乏、
 秋、皆君を貧乏の
 今度、帰つて見ると、
 却、一通り、お魚、
 今度、成金、お魚、
 正、君は、大成金、
 三浦中助は、在外、
 遺録等陰に、
 暮らして居るの事、
 口は、おとめ、おとめ、
 今では私任の生活、
 之も、貧乏者、そんな事、
 有りませ

日 ぶら
日 又 新 以上の金持も然るは有
りせん

日 昔を教で実行されたのにお
日 然らざるに。そんな事は有りませんがこれ
は自然な事の度平均を求めた結果なの
し。……先生待て下さい。説明も致さず
れば成りません。先生とては少し早く絶
りの疑問が解きたくてある。……
日 今後は、……

新

日 ぐり成さつて下さいます

日 やそれが身……どうも誇りも喜ぶの
事が多いのを頭の中が混雑して、譯が
ふいふ難い問題の後……
吾輩 聊か不平がある。それを同時に三浦君
は非常な感激を拂はざるを得ない。
いや、その不平といふのは他でもない。今日の
お入は就てある。吾輩 決してお入り騒ぎは
喜ばないのを、野次馬の足跡はちねい
うにけねい。吾輩の知には君
 除いて

日 先を、それは如何に脱れさせ
 日 的の脱れさせ
 日 古の脱れさせ
 日 何の脱れさせ
 日 今日の第一機括などの位多く先を
 市友人達が来るより先か知れずせん先を
 又は市隠脈の類の方か殆ど全部死
 絶えたりその市悲観の無人修行を思
 せたり先を世間では嘆きする事
 せたり先を市六の際あつて方は非業多

は一人と書て居る。や、吾輩程長生をせ
 早く死んでしまつたの事問題の如何か然るを
 無の限りはけい痛た事を知つた者が一人や
 二人と書へて居るをせんといふ法は無の如何
 人情欲より薄しといふも、三十年目で清朝し
 此吾輩を驚かすといふ事な無の
 嗚呼、人間、心の底の厭うる時を飽く
 のであらう
 □ 俗説の調で溜とと論じしれ

~~too cool~~
~~...~~

へは新きまて、新情朝者又権近く、我勝は
 権今を求めます。かゝる名士と自分も親しくも
 いふ事をも上道なす。つりの者日中は多か
 つれので有りながら、そんな虚禮は悪習権止
 させずして、心の敬慕の意を以て、簡単に出
 へて居ります。海軍は新朝者の顔を見れば
 は、それで満ちて引取るのをしめて……
 曰 それは感心！
 曰 徳の敬慕、代表者が定まるの如きのは、
 て世人の金やをとり出すのが例を則ち新情

う所花きつれよ。年始終ど毎々何午と云
 う所降して所花すれよ。それ知れ多額のおん
 生の知れ、今日お出へしたの如く、おれ知れ
 るるわけでも、何百人と有りきつれ
 曰 はことごと、車敵云つては困る。あの通り
 一人も私の傍へ寄つて権今して……者は無
 かつれよは……
 曰 此頃の世へは皆あつたの事です
 曰 えッ
 曰 昔は停車場より、湯止塔より入成入るは、
 湯止塔より入成入るは、

けて居るに
 佐大切が知れず
 かの佐押詰
 守中は種々事件の
 係用人員が
 皆善税即ち新
 大さな事件は別
 一と報告者が入替り
 形容を
 眼を
 脳へ

何の
 専ら
 一種
 何んが
 成る
 直ぐ
 善税
 大體
 一體

消滅してしまふ。寧ろそれを加へて
 為税は喰ひしやうのさす。と云ふは先づ
 市議等を全然封じしめて了ふ氣では市議
 士せん。全部為税の市議取。上で、つり
 叶頭の分明のどの程度を考へておるん
 豫備知識を市備へ下さつて後には、イリテ
 市高説を拜聴致しませう……
 日や、それは如何の考へしやうぢや。相今の口を
 押へて置いて自分だけ思ふ様腹一杯の事を世
 日得……んぢや。百……
 山

日 これを政年運動と利用し、票敵者が有
 り……一丁整の……問を……
 互對黨員の為税は残るが政見を喰ひんを置
 いれりて皆……
 日 ちやア少……其為税の……
 山 柳の右の方にある銀をお押し……
 直ぐ辯じ……左の方をお押し……
 日 又……止り……
 日 ちやア音楽……好いふ
 山

目 子供も涙乳やお伽噺が吹しきり

さとしさし
これは終つてお。今夜は早く寐

二〇
天の声——枕の前提——生活の不平は
世界の古問題——極端な危険思想——
物質を得るは鳴る——社会経済の必用
——五好の機關——一箇の創建——

食後の談話も早々、鳴浦は一人で
お話をし入らん。

□ 宿室の様子も大分変わらぬ。何んか
何んか気が向く。何んか気が向く。何んか
眼も配らぬ。

□ 急いで宿問社で成る。お話をし入らん。
枕をみると、普通の場合、何んか気が向く。

□ 午の取上げと見ると少し、振りを見る
とガラリと鳴る。何んか気が向く。
何んか気が向く。何んか気が向く。
何んか気が向く。何んか気が向く。
何んか気が向く。何んか気が向く。

□ 再び発声を始めぬ。
 先生は市隱遊堂の日本。否、日本は有り
 ではない。せん、世界各國、地球上人類の住する
 地種々の形式で現れ、千々何々を生けり
 不平均と云ふ事、が古問題で、在りしやない。
 言葉を替へて、へは、食糧の豊穡。温度の
 争闘。個人は他人と、國家は國家と、
 皆是が、衛生の、世を、極端な危険
 思想を、生かす、苦痛を、無政府を
 我らして、湯瀉の、苦痛を、生かす。

□ 右端の鈕を押して見ぬ。
 先生！ 声は私のです。三浦中助の声で有
 りますか。之、申上げますのは、天意を傳へる
 のです。可憐ッモリで、これか、さう、善悪
 執て。前提です。と、善悪機が鳴つた。
 □ 急いで左端の鈕を押して、発声を始めぬ。
 先生、餘計な事を、聴かすは、困る。無
 駄と省く、生かす、善悪機では、無
 おいと、諦めては、イヤ、あんな、私、餘程
 モーロク、しん、あ、山

之の三浦を起しは行の……
 ……ちえッ、どうせお捕らぬさうな後を
 聴いて見るか
 三浦は再びお捕まら入る夢枕をし
 直ぐと又登るを続けぬ
 何れに申す申上れると先きの事をすめぬ或は
 人を馬鹿にするとは片を腹かき知れやん
 が順序です……
 ……

日 斯うして一人で憤慨して居るは眠るがよい。

九

一 暗黒世界——大明星——救世主の
 出現——耶穌の釋迦の子——新
 星の影は光無し——科学の力——
 薬の力——健康の平均——馬鹿の狂言——

事を云つて私を興へてはイヤな……
 と云つた処で三浦君は以所を合点しんが善
 枕を致つた事を仕方が無い。これは中々眠る
 べく候つた。あと、困つたさア
 公明は頭を……
 ……

情を願つて置きたるれ。その會社で一年を
 引渡りて置つて居りませう
 曰 ふう 聖蹟かと説明してのまゝとついに合致。
 曰 實は 耶蘇も釋迦も孔子も皆の新星
 の星は光り有らざらん。施設は實に驚く
 べき威力を有して大成功でしれ。それ故に
 ず。科学の力あんです。最一ツ細の云ひます
 と藥の力あんです。星の平均と云ふ事は物
 末の末です。極端上の問題です。新救世主は
 人の健康の平均を考へたのです。思想の平均を

曰 うん………と 翁は苦笑せられた。
 □ 我聲は續いた。
 曰 先生は、いふ事ある。爾より 陸上陸軍時代
 忽然として 一大光明を認めしをのきしれ。
 暗黒世界は正に 一大明星を得たのを有りませ
 ず。わがこゝろは日星の光です。偉大なる日星の
 へつるを 秘世の出現致ししれ。併し女
 人は名をいふのを 深く今下り隠れ
 て居りませう。世事業は併し 先刻 片記
 東京通の終

考へられりす。危険思想を人の抱く者は要する
 腦の一部の病所を有るゝで。腦の一部を病
 所の有る以上は、人の身体は完全で無い。
 つまり健康は思ふ如く有る。相違無い。かゝるであ
 る。この高確率を知り、薬を服する。これに
 思ひの平均して来る。健康が平均して来る。
 危険な考へを持ち、病所無く成つて来る。と
 結語を以てする。と
 〆と云はれ喜びし。と

□ 発声は次第に調子を高め来つれ。

〆 中理に於て発明を進め、結果遂に一大
 奇蹟を創出し、その高き、れりが日を知れ、遂に
 式會社を起す。

〆 〆それが實際に於て有効である。如何にと
 人は疑問を發し、れが善利は書中より人間
 で思ひ、れが善ハ、くも無い。鳴らんが、けの
 事を語り進む。

〆 〆その一、大奇蹟をえ、し、その、各、
 奇蹟が、その、は、發明、それ、例、せ、

~~政治小説~~
~~政治小説~~
~~政治小説~~

馬鹿を治す薬と云ふ。狂人を治す薬と云ふ。世の
それこそ知れ造られたるもの。悪く成功しまし
ぬ。重いのを成ると入院して其の部を注射
してするのです。その故病人も絶えねば罪人
の無く成りきれぬ。従つて凶悪も刑事も警察
もそんな者の必用を感つたは成つたのです。
国民全体の思想が健全に成りますれば
各自の秩序を保つて少くも花蔭は事有
りせん。

39
大光明がふむ——や、一寸の鏡然り
世の中を成つてあるものは、私を少し考へ
ければ成るものか
□云ひつゝ左の鏡を押しぬ。
□発聲は止つた。
□どうも之は人間界の一大革命が。財産
の平均とりも思想の平均健康の平均とは能く
考へたものか。直ぐい。直ぐい。その又考
へる鏡つて、それこそ富者の薬の発明さぬに
事人は人生の最大幸福である。や、従つて

然るに会社は以て説明を全部省略し日本
 政府は、一、会社、利益を積むのを目的
 とし、二、これを以て日本帝國を益す
 強大なるものあり、その日本帝國の事業と世界
 の人類を救ふと云ふ様は、名誉も利益も悉く差
 出さずしてひます。日本の始まつたの頃よりし
 い男の中の男の地位を占めて居る。その代り世に利益

+

一行
 日本始まつたの頃より男の中の男の地位を占めて居る。その代り世に利益

平

右の如く押し又押しして居る。

長生もする。年を取つて老くとも
 居る。後三十年を酷く進歩し居る
 であらう。是が文明の真髓であらう。だが
 然るに、その進歩を以てて会社は中々計算し
 切らぬ程の巨大なる利益を得る事がある
 う……

~~unreadable~~

存りきり。や、単に一省の彼人が減ドてある
 ばかりでなく、諸官省がズツと減ドて居ります。
 としよは、政府の収入は外(外)へ拂込(拂込)す薬の
 代が非常(非常)な高(高)です。国民(国民)の税金(税金)を取立
 てる必用(必用)が有り(有)せん。その(その)わけ(わけ)で、どの
 位省けるか知れ(知)せん。それ(それ)が陸海軍(陸海軍)の
 近日(近日)停止(停止)する筈(筈)なんです。世界(世界)の人類(人類)總(總)てが
 健全(健全)の思想(思想)を持(持)つ様(様)に成(成)れば、戦争(戦争)が
 起(起)しや(や)が有(有)り(有)せん。既(既)に獨逸(獨逸)のカイゼルの
 様(様)な頭(頭)の廻(廻)つた人間(人間)は、絶(絶)えず(えず)止(止)ま(ま)り(り)ま

今(今)は政府(政府)の大部分
 の事務(事務)は、社会(社会)科(科)係(係)課(課)
 員(員)に任(任)じて

百(百)位(位)程(程)の
 事務(事務)員(員)

一(一)方(方)では、特殊(特殊)の又(又)技術(技術)も要(要)し(し)ます(す)が、それ
 を一(一)方(方)で引(引)き(き)合(合)して、警(警)備(備)も大(大)工(工)場(場)を金(金)で
 一(一)方(方)で十(十)分(分)許(許)す(す)て、堅(堅)ん(ん)固(固)く(く)學(學)業(業)を續(續)け(け)て居(居)
 り(り)ます。然(然)し、少(少)く(く)も譯(譯)下(下)す(す)の(の)政(政)府(府)の後(後)人(人)は上(上)は
 大臣(大臣)も下(下)は給(給)付(付)小(小)使(使)に至(至)る(る)ま(ま)で、昔(昔)の様(様)な
 事務(事務)員(員)の取(取)扱(扱)は、
 員(員)がズツと減(減)ら(ら)る(る)に任(任)じ(じ)ます。課(課)長(長)も部(部)長(長)も
 とい(い)ふ長(長)も、や(や)れ(れ)参(参)事(事)官(官)も、次(次)官(官)も、それ(それ)も
 大臣(大臣)の手(手)を經(經)て、總理(總理)大臣(大臣)の下(下)で持(持)出(出)す(す)とい(い)ふ
 印(印)の捺(捺)し競(競)べ(べ)を(を)する(する)必(必)用(用)も、魚(魚)く(く)さ(さ)つ(つ)て


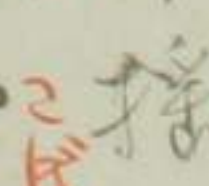
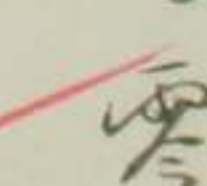
現子カイゼル
 あり世界の
 の後子あり
 あいで大野心
 誤を廻り
 性格が一
 軍国主義をガ
 然る風は




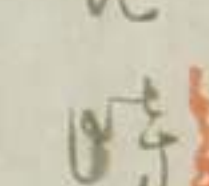

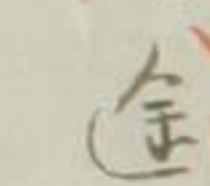
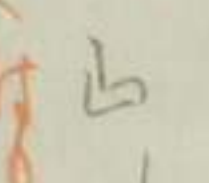
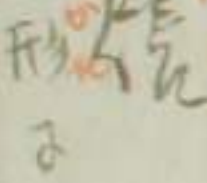













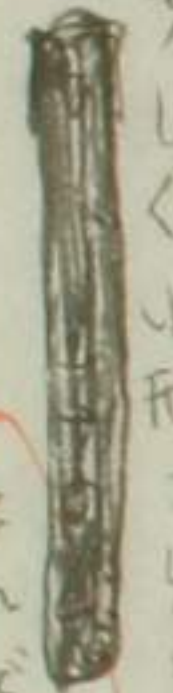








すので、軍備を充たせしめる心用が有りません。
 永嘉の平和が、来てある譯、あんで、先づ方
 正統年のは、国防問題が、随分、喧しう、存在ま
 して、議會開きの度、毎日、豫算案は、以、軍備
 何時も、衛官して、居り、いか、今日下
 何、全く、そんな事、皆、存在、せん、極、その、政黨
 せん、か、極、く、の、解散、を、とり、ま、れ、挙、國、一、致、と
 事、を、能、く、云、ひ、す、て、それ、を、理想、とし、て、時
 代、有、り、す、の、の、併、し、其、理想、は、却、と、現、現、さ
 難、と、考、へ、ん、事、も、皆、在、り、ま、す、の、が、今日、では

平

全くの挙國一致です。思想の平均の、あ、と
 居り、す、の、の、併、し、其、理想、は、却、と、現、現、さ
 せん、
 ……ふッ、ふッ、ふッ………ポ—、ポ—

善、枕、は、自然、の、沈黙、を、つ、つ、れ、機、械、が
 拒、つ、れ、の、と、見、え、る、
 口、
 や、肝、腎、ふ、此、也、今、断、れ、ん、は、仕、様、が、無、い、
 聴、き、は、い、事、が、澤、山、有、る、ん、だ、今、夜、は、徹、徹、一、を、
 聴、い、て、好、い、の、が、其、所、で、日、本、が、進、ぶ、の、理、
 想、の、文、明、境、又、入、つ、れ、と、は、あ、る、意、義、で、有、つ、れ、を、

れびの子、今断つては中々翌日の朝まで待つて
 如何なるか成る人の知らん山と云は
 残多かそ、夫より強く右端の銀を押し見て
 枕を動かして梳く見たりし、遺憾
 直ぐに発声は止つて、如何なる成るぬ。
 如何なる仕方が無いか。は儘宜探つてみる
 他は無い。終つての考へざる可もざるは、
 いゝ機械が発音してゐる、それが狂ふ事か
 ら、見非無い人間だと眠り掛けられ、
 起つて話を仕掛けた好い、山と零

し、眠り、れ。
 □不眠、寝が着いて見ると、宜掃基の枕頭
 卓子に有つて、又上り又上り枕が乗つてゐる。
 何、替枕がある、善枕で機械が狂
 う、時、代り、用、知れぬ。
 けれど、心と、一ツ話、二度、聴、遣つて見
 て、中、は、困る、試みる、遣つて見
 る、山と、替枕、取つて見、
左、右、銀が、附いて居る、形式、山と、替枕と、分つて、


日 どうかの共挙国一致で、政業分立の必用
 を認めよう成つた以後の政事上の模様の知り
 れいもんが...と云ひつゝ、右端の鉛を押し

□ れ
 忽ち発声

日 子供のまぶさを見えて
 涙き淵へと落ちける。
 日 三浦君間違へて運いたの...
 公羽は吃驚して左の鉛を押し、発声をゆるめ。

①

②

③

平

日 あッこれはイカン。子供にさせる養親がッれ
 三浦君間違へて運いたの...
 日 三十年の世の中を運んで来て、現代の知識
 界には本格的幼稚園の生徒がとどろき出てくる
 ... 又は三十年前の子供...
 下は珍らしい昔の歌とて保存されてあるの
 が。嗚呼併し私...
 □ 知る前、又鉛を押しす。



朝下成 しやうじやうせい
 内中知 うちちゅうち しんぼく
 島浦翁 しまうらう翁
 白 しろ

早 はや
 市花 いちばな
 何 なに
 三浦君 みうらきみ
 白 しろ

見 み
 白 しろ
 煙 けむり
 立 たて
 白 しろ
 箱 はこ
 白 しろ
 箱 はこ
 白 しろ
 箱 はこ
 白 しろ
 箱 はこ

浪 なみ
 花 はな
 市 いち
 花 はな
 翁 うん
 白 しろ
 箱 はこ
 白 しろ
 箱 はこ
 白 しろ
 箱 はこ

花 はな
 市 いち
 花 はな
 翁 うん
 白 しろ
 箱 はこ
 白 しろ
 箱 はこ
 白 しろ
 箱 はこ
 白 しろ
 箱 はこ

平

~~刑罰~~
~~刑罰~~
~~刑罰~~

全艦です。訴訟も必用を認めきつて、司法省
 なんか、ホシの形式の内閣。一課を存立し
 てある位で……
 日 陸軍省、海軍省、三つある。司法省が……
 目 今では無い。……
 所 で先づ第一、問ひたいのは日本の財政ね。
 各 國のその薬劑を……
 起 過は勿論の事で、國庫に入る金額は非常
 多 量で……何百億円、何千億円と……
 と考へ……

三浦君、早速だが、挙國一致の後は如何に
 此の……
 居る……
 □ 翁は急ぎしんで問うれ。
 日 翁は先づ細密な……
 行の……
 片在……
 を拾……
 り……
 監獄……

日最幼は金を雨りや。今でも縁分のは取
 つてありやが、元來か利益本位で無いのを人類
 平等の幸福を待たせよ。有るんでは、日
 本の立場として、慾張つては、居るんでは、
 人持前の義徳振を發揮し、他人の覚醒
 を興へる。用と有りやが、未開國へは
 無代償で、配布し、各りや。亞弗利加や南洋
 諸島の食人種、あんなかへは、ドシ〜只で畫つて
 居るや。あゝ、開け、() のは、徳方の發明
 品と交換する事は、成つてゐるやが、それを

新

機軸的方面
 け
 は、大い、
 機軸的方面

日と空中飛行の航路、藥品の代償として
 彼方の航路の機軸で、取寄せんか。と
 日航が、航空界の航路、日本に於て大々
 明か有りや。今日では、日本式飛行機で
 ければ、安心して、人が乗るや。ん
 日航一、大發明が有つたか。日本
 の航空界は、官製飛行機の無かつたか。ぬ。
 いつのち、海軍有つた時、十餘基、所

いよゝゝ時代は成つてくるのね
 何の何を愛つてある。その説明を
 聞くので、頭腦の明暗を誇つてある
 職員、札を額に懸けたい位。
 食後、茶を嗜しあひたり。
 さア其所を思ひ行儀の一件で、どん
 ちぢぢ見
 日本で有つたのか、それを少し日
 早く聞
 口を結へ、と翁は氣を成つて耐
 る、手分此行儀の無り手れ時
 話します、鈴々々も、おと先
 所

如何い何りてふく、
 喜如梅日成りすれ、と三浦は説明
 何んと云つて、米飯の炊立て、味
 汁の熱いのを、フー、フー、
 と云つた、無いね。それ、澤庵と梅
 乾は又格別
 別名ねえ
 米飯の炊立て、味汁の熱いのを、
 配膳する様、成る、居りませう。
 早晩、そんな事、成る、居りませう。
 早晩、そんな事、成る、居りませう。
 早晩、そんな事、成る、居りませう。
 早晩、そんな事、成る、居りませう。

後の先生の発行部を親して、プログラムを生
 けて見せました。何年か前、第一日、市
 況期披露の書状を出して……え、歓迎会。
 申しは既う非常な粉を。又片請海を願う
 と……
 在り……
 待てを呉れ給へ、私は既う隠匿者で有る人
 の同僚である。高化考き最近の三十年を餘所
 して、何んぞ知る下子素な者で、善親子由も
 少くは覚醒……を素なけり、時世遷り其
 しく福田老人也。それをえんは、歓迎……
 知識……
 知巴……は百會……昔は旧事を語り……
 いが、学会……
 体……
 よ……
 用……
 出……
 有り……
 用……

後の先生の発行部を親して、プログラムを生
 けて見せました。何年か前、第一日、市
 況期披露の書状を出して……え、歓迎会。
 申しは既う非常な粉を。又片請海を願う
 と……
 在り……
 待てを呉れ給へ、私は既う隠匿者で有る人
 の同僚である。高化考き最近の三十年を餘所
 して、何んぞ知る下子素な者で、善親子由も
 少くは覚醒……を素なけり、時世遷り其

がやア人を見せ給う同知了 扱ふ氣を招待する

□ 結と 馬南翁は 思ひしごとく

司 先生 馬待ち下す。決して然るに譯では
馬待さん。そんな輕薄ふいふを待てる者には
士として一人も馬待さんとは三浦は押宥めぬ。
これさういふ何んぞ私の講演を希望するものか

司 先生 考へて馬待さんさういふへうの中はよすもの。
以進安海基の世の中を三千年も明けを待てるものか

人が馬待さん

司 先生 於て初めを見る譯さんです。正し生

司 國寶さんです

司 先生 於て初めを見る譯さんです。正し生

司 先生 於て初めを見る譯さんです。正し生

司 先生 於て初めを見る譯さんです。正し生

三浦

日 いえ、そんな無稽な事では有りません。時勢
 知の如く今の老人は悉く不老薬を用ゐて居りま
 すのを、それを用ゐる下は長命してゐる人を其
 見比事、無い若人達が多いのです。科学的
 には先づ研究して、薬を用ゐる同様の老人と、
 用ゐざる先づ研究して比較研究したいと思ふ……
 日 それを話したい。時勢は……
 日 左様ですか……
 日 それよりも私は、その不老薬を早く用ゐて
 見たい。これぞ、ズット若く成ることを……

日 難有う時在ります。その時、私が振りて真面目
 ぶ會ひも是非一ツ先生は時、臨席を願ひたいと
 云つて申し込んで来て居ります
 日 それは何の由
 日 學者の會です。博士団体の會ですが……
 日 學問上の議論は餘り得意を……
 日 いえ、それは市講演ではなごるせん。唯先
 生の時、健康知識を示して下さるは宜しくのを
 日 それこそ私も見せ物扱ひです。人がやア……

早業かつやく その痛所いたところを検査けんさして甘々あまな様子を巡視官めぐしを呼ぶよぶことと三浦中助みづらなかすけは云いはせられた。
 曰い馬鹿ばかな事を云いひ給たまふ。人を見世珍みやげ拾ひろひす。
 一歩いっほも縮陥ちぢみが有あるなんて怪あやしむ。君は僅わずかを侮辱おとしす。
 曰い天あま先まへ生うれ決けつして侮辱おとしでは居いない。科学がく研究けんきゅうの術わざは何なん人ひとと異ことなり一身いっしんを捧たげろ。今日の紳士しんし道みちです。もし試験しけんを要よする場合は一國いっこくの首相しゅしやうと異ことなり喜よろこんで文ぶん房ぼうを出ですのが普通ふつうと成なる。云いふ。

曰い 此この成なりり。何なん人ひとも無ない事ことです。
 曰い 此この折せ角かく。昔むかし老人らうじん振ふるり人ひとの見みえ。バツと居いりな

曰い 此この物ものを見世珍みやげ拾ひろひす。云いふ

十三

一 脳のう。脳のう。脳のう。検査けんさ。巡視官めぐし。一 脳のう。脳のう。脳のう。検査けんさ。巡視官めぐし。一 脳のう。脳のう。脳のう。検査けんさ。巡視官めぐし。

曰い 先生せんせい、此この事ことを腹はらに居いる。何なん人ひとも無ない事ことです。
 曰い 先生せんせい、此この事ことを腹はらに居いる。何なん人ひとも無ない事ことです。

何んか、凶悪さんか、癡止して居る、
 嘘を云つたのでは無いのか、と鳩浦は憤慨の度を
 示して居る。
 大正初年の凶悪並に、加之腰、洋剣をさへ
 持つて居る。
 大正初年の凶悪並に、加之腰、洋剣をさへ
 持つて居る。
 大正初年の凶悪並に、加之腰、洋剣をさへ
 持つて居る。

三

科学的に今日の日本を成し
 れるに有りきやないか……
 何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を……
 何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を……
 何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を……
 何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を……

紙を保持せしめ
視官の志つんと
間もふくま
貞子

十四

一 旧態再発 一 隔世遺傳の原理 一 ガーゲンの
進歩論 一 薬の効能 一 三葉人の招致
国技能 一 既述し 一 相撲は七
全身運動 一 大分能の操縦

日 ヤア何のきれ
感情系の憤怒が大分
緊張して合ります
ハ號の十八番を少し
上げの事を對して
然るすれは直さるる

新

ドシテ測頭を試す
免下さい一寸測頭を
見ます
洋氣と見えん
金庫知れり
長い糸
射し及
及

□ 驚きの連続する一歩の先を歩上り下る
 まし。腹の横で配った素直な心、電話さへ備
 けたのは、通り早う歩たすうと云ふつゝ、羨
 望し。

□ 鳴神はまがかりの思ふに居て。
 □ とうとう集らん、私を神経異状者として
 認めて、おれん事を……

□ 自由な去人は、知らず知らずのうちに、
 何を、それは何んぞも無い事を、歩たすう。
 誰か、旧態再登と云ふ事、歩たすう。

□ 以て、隔世遺傳の原理が、若へすうと、人猿同祖の
 動物の感情の現代の人間、時と発依する……さ
 へ云つてありませう。

□ 健全にして、遺傳する……時と、その起り、備け
 ず、その時、その道々、世に、素と頂き、
 ず。先を、それを、目上つれ、決して、歩配、
 ず。何んぞ、歩たすう……

□ ガンが、井の中の進仕、論、あんな、老、夫人が、知つて
 る……頭の、ほく、成つれ、所、な、を、あ……

□ 夫人の、如う、云、は、れ、て、見、え、な、い、お、れ、ん、事、を、

新

□ 驚きの連続する一歩の先を歩上り下る
 まし。腹の横で配った素直な心、電話さへ備
 けたのは、通り早う歩たすうと云ふつゝ、羨
 望し。

□ 鳴神はまがかりの思ふに居て。
 □ とうとう集らん、私を神経異状者として
 認めて、おれん事を……

□ 自由な去人は、知らず知らずのうちに、
 何を、それは何んぞも無い事を、歩たすう。
 誰か、旧態再登と云ふ事、歩たすう。

□ 先きの情思を忘れてお月様は斯う云々
 □ 三浦君はクニクニ笑ひたまふ
 □ 如何を思はす。薬の結果は？と夫
 人の先が問掛けれ。
 薬？ 股んで見たか。お月は何んとも無いなと
 言は。お月が既うお月様の様子を言は。居在りせん
 何と云々。三浦君問掛けれ。
 何れが胸をさてる様。お月が有つるか
 否。お月は悪びる事な。

新

得えい。 錠剤
 □ その緋色を ~~〇~~ 取らして。三粒より糖
 吞。 錠剤
 □ 口中唯爽のうらや。何んの刺戟も感
 ぶ。お月が問ふ。お月が明る。何んか
 かと思ふ程ハッキリして来れ。
 □ お月、それを三浦君博士手中が私の旧 ~~〇~~
 老人スタイルを現代の老人と比較して見よ
 と云ふ。お月。それは頗る面白う。何時ぞ私
 けは席します。

考へては、百目次第も無い……と頭を撫でた。
 白 左ればは先づ博士會へも席を席下……
 赤い 他は種々招待者が有り……が個人向き
 の 後……
 朝野の淑女紳士を……招待……
 三浦は云……
 三浦は……
 大招待會を……
 申……
 先生……

新

白 いえ、それ……
 安心……
 三浦……
 公明……
 博士會の招待を……
 何分……
 他を……
 し……

呼ぶよ、さういふお成りさうさう
 三萬人の招待客！ そんなに呼んでは
 入る処が無いぞ。野郎とて東京市内で
 は如何をよ。目比谷公園（目比谷）は
 今如何成つてゐるか
 知らんが……
 田 いえ、野郎でよく一家の中を
 お客が
 田 一は家の中？ 國技籠が焼けた年は
 居たか成つたか。世再築も私は
 それが前より擴ち方まで建築
 されたのか

新

夫人が打消し掛けた。
 田 正し、お費用まで当分の
 掛りか、お成りさうさう
 田 先生、何程も掛りか、お成り
 田 だ、呼ぶよ、さういふお成り
 田 不客の数を……
 田 先生、お成りさうさう、お成り
 田 三萬人の招待客！ そんなに
 田 知らんが……

曰 國技館も再築致し、下部の
 子三萬人を入ると、樂々宴會の開ける程の廣さ
 下は、在りて、既に、今では、他の、目的は
 使用、され、居り、を、い、ふ、は、……
 曰 ちや、相撲は、衰へ、た、で、す、か、それ、は、……
 け、無、い、相撲は、其、の、吾、朝、の、國、技、昔、の、一、歴、史、
 在、有、し、と、居、る、と、直、接、間、接、に、國、民、の、元、氣、を、ど、の
 位、整、舞、し、も、事、は、知、れ、ん、の、を、又、体、育、上、の、
 有、効、下、し、れ、が、お、は、臨、と、觀、人、根、性、を、傾、け、て、彼、
 自、ら、階、上、落、し、れ、の、それ、と、世、間、の、ハ、イ、カラ、思、考、の、日、
 因、け、ん、を、裸、体、で、力、を、闘、は、す、の、は、野、心、家、だ、と、い、
 何、ん、か、と、い、ふ、そ、ん、だ、米、論、の、な、ま、亡、び、た、の、よ、と、
 才、は、吾、輩、だ、い、は、議、論、が、あ、る、運、動、と、い、ふ、運、
 動、中、相、撲、は、有、効、な、は、他、は、無、い、の、を、高、野、心、
 と、い、ふ、働、き、は、可、も、な、全、身、運、動、で、あ、る、な、ら、ば、
 肉、の、發、達、が、著、し、く、そ、の、頭、腦、を、明、智、し、……
 曰 先生、と、い、ふ、市、議、論、中、で、す、が、大、分、脱、線、致、
 し、す、れ、相、撲、の、こ、び、を、い、は、他、の、理、由、が、
 在、り、す、と、い、ふ、と、三、角、が、口、を、い、……
 曰 他、の、理、由、が、有、る、か、と、い、ふ、と、羽、は、あ、る、を、願、……

新

曰 國技館も再築致し、下部の
 子三萬人を入ると、樂々宴會の開ける程の廣さ
 下は、在りて、既に、今では、他の、目的は
 使用、され、居り、を、い、ふ、は、……
 曰 ちや、相撲は、衰へ、た、で、す、か、それ、は、……
 け、無、い、相撲は、其、の、吾、朝、の、國、技、昔、の、一、歴、史、
 在、有、し、と、居、る、と、直、接、間、接、に、國、民、の、元、氣、を、ど、の
 位、整、舞、し、も、事、は、知、れ、ん、の、を、又、体、育、上、の、
 有、効、下、し、れ、が、お、は、臨、と、觀、人、根、性、を、傾、け、て、彼、
 自、ら、階、上、落、し、れ、の、それ、と、世、間、の、ハ、イ、カラ、思、考、の、日、
 因、け、ん、を、裸、体、で、力、を、闘、は、す、の、は、野、心、家、だ、と、い、
 何、ん、か、と、い、ふ、そ、ん、だ、米、論、の、な、ま、亡、び、た、の、よ、と、
 才、は、吾、輩、だ、い、は、議、論、が、あ、る、運、動、と、い、ふ、運、
 動、中、相、撲、は、有、効、な、は、他、は、無、い、の、を、高、野、心、
 と、い、ふ、働、き、は、可、も、な、全、身、運、動、で、あ、る、な、ら、ば、
 肉、の、發、達、が、著、し、く、そ、の、頭、腦、を、明、智、し、……
 曰 先生、と、い、ふ、市、議、論、中、で、す、が、大、分、脱、線、致、
 し、す、れ、相、撲、の、こ、び、を、い、は、他、の、理、由、が、
 在、り、す、と、い、ふ、と、三、角、が、口、を、い、……
 曰 他、の、理、由、が、有、る、か、と、い、ふ、と、羽、は、あ、る、を、願、……



藤が花明さぬを 合りきりて 現代です。力が足り
 ない者は、その方の 藤を 膝の 且つ 注打 新し
 す。昔の 大力士 常陸 梅ヶ谷 或は 大戸山
 鳳五の 大力士 柳本山 せんふ 終度の 大力士は 素人
 の 間より 澤山 出来たり。その 相撲が 一向 面白く
 有りません。 何れも 新相撲 ありとぞ 相撲の 記事を書き
 り。今度の 横綱は 大力量 何グラムを 注打し
 れども、一方、何を川よ。 〇、何れ 相撲の 強さ
 がある。こんふ 屋をば 少くも 興味の 有る者
 自然の 相撲は 癢く 来る。二度目の

新

十五

大力士は素人よりある。一市の公會堂。一
 區の一館の大建業。一橋本記念館。一三喜人
 への案内状。一急字版。一著者。一因縁。一版
 文士は去後。一前世界の。一動勢。一

曰 是れは 先生 一寸お考へ ありとせぬ 合りきり
 ので... 三浦は 笑つて あり。 真まよ あり
 といふ... 他、理由 有り。と しては、 是れは 杜
 けの 考へ ありとせぬ 三浦 翁は 不審を 打つれ
 曰 先生、 國民の 健康が 平均 して ありと 居りませ
 不完全な 部分を 補充する には、 その 特殊の

日 國技館は、素人形や納涼會などが専門で成
 して居るとする。……
 日 世傳で話の漸く元へ戻り……の三萬人
 日 お客を修は一會を會するものは、市の公會
 堂も在るが、別々又各名士の記念館と
 して建設される。……少く有りせん
 日 そんな澤山大建物の出まわりのア
 日 大概一區は一館の割です
 日 てもそれを借りるとすれば、却と高傳……

新

日本書紀
 卷之八

或は世界大戦の機軸……
 南北極地の……

日 昔は、社会救済の薬のお蔭です
 日 それでは世所々招待會を開くとして……
 朝の通るが、其室内状を……
 さいが、生憎名譽を有し……
 三十年前……
 日 いえ、それは記念館附の圖書室……
 生を中心として……
 調査會員……
 書誌……

自然の
 相當の財産が……
 新

日 待つて……私に世話……人間は……
 精神……成功……
 皆貧乏……能く……
 れもん……
 日 待つて……私に世話……人間は……
 精神……成功……
 皆貧乏……能く……
 れもん……

Handwritten notes at the top of the page, including the characters '又' and '白'.

Main handwritten text on the left page, written in cursive Japanese with red ink annotations. The text discusses the history of printing and the role of the author.

一時疑問と云ふ
念ふとは言ふ
不覚見で

Main handwritten text on the right page, continuing the discussion from the left page. It includes several lines of text with red ink annotations and a circled section.

日 成程 誰 ^{思想も大概} 同様の 成つては 小説を
 書いたる 一高 珍しく 有る事
 日 其所 行く 先 三年間 原形 儘 保
 存 する 思想 は 貴い です。 新 世界 の 動 画 マンモ
 ース や、イグ ナドン さんの 遺 骨 を 発見 した
 り、三十 年前 の 思想 其儘 で 小説 を 書いた 方
 どの 位 世間 を 敵に せり、^か 知れ ぬ 事 せん 事
 日 然る 心 あり。 小説 なんて ぞ 昔は 戯作 と 稱 せ
 備 へ たり、^の 明治 時代 まで 文士 と 云へ 世間
 知 とも 台 詞 者 が、 自 分の ノロケ を 書く 下 擬 して あり、

~~角 中~~

~~四 五 六 七 八 九 十~~

念 念 版 で 小説 を 讀み 得る 事 を する 事、 親
 しみ 一層 深い 事 也。 日 ちや 不 得 して 文士 の 収入 も 方 きの 事 也。
 日 亦、 これ も 矢 張 減 ち する 事 也。 今 居る 文士 は
 どう 昔 と 負 え ず、 如 城 の 事 也。 日 何 故 也 乎
 日 不 得 例 の 筆 の 力 で、 才 木 は 刻 意 する 事 也。
 日 一、 國 人 の 銘 を 書き 置 けり、 昔 の 繪 巻 紙 葉
 露 伴 或 は 漱 石 鴉 外、 又は 坪 内 逍 遙 也。 日 此 様
 此 様 亦 大 家 は せ じ せん 也。

士君子は多く顧みあつた者だが、それより大正
 初年に入ると外(外)の世の意見をも小説の体
 借りて発表する政治家なども有つて、大分注目さ
 れて小説家として見ても好いよ。はこここ
 □ 公羽は勝後、大分歩様様である。

十六
 一屋上の昇降台—少年運轉手—月世
 界近くまで—知—ぬ星の世界へ—理論
 二箇・鐘物—餘り騰り過るにぞ—

□ 廿日三浦中助の代り、婦子小一郎同夫人

函子、その金孫花村嬢とを、飛石機(山浦)

花無り、東条見物といふ事、成つた。

花ふくは無いのぬ。いゝく惜—く無い命が
 落ちて、飛石機に落ちて死ぬのは、片先(片先)蒙りた
 ち正初年、は、陸落又陸を落で、空中の機
 者などの位、出づれば、知れぬとんが、山と公羽

飛石はブル—である。

先生、ちあまです。あの時(ト)は動力が
 ひます。その時、操縦は熱心(熱心)を存(存)りし
 秋も、晴(晴)るや、あの(あの)落し、ゴロツヤ(ゴロツヤ)持(持)き

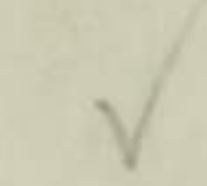
新

士君子は多く顧みあつた者だが、それより大正
 初年に入ると外(外)の世の意見をも小説の体
 借りて発表する政治家なども有つて、大分注目さ
 れて小説家として見ても好いよ。はこここ
 □ 公羽は勝後、大分歩様様である。

十六
 一屋上の昇降台—少年運轉手—月世
 界近くまで—知—ぬ星の世界へ—理論
 二箇・鐘物—餘り騰り過るにぞ—

□ 廿日三浦中助の代り、婦子小一郎同夫人

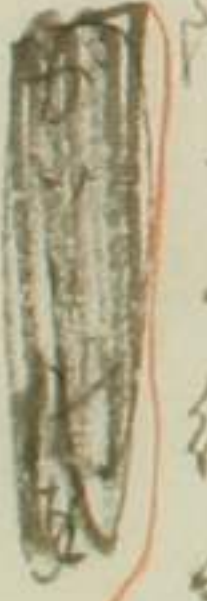
明申上あきらめずふるあきらめ。心こゝろ用もちひあきらめ有ありあきらめきあきらめずあきらめ。今日こんにちはあきらめ運うん轉てん手てを
 附つけあきらめずあきらめしあきらめとあきらめ善よ吉きち人ひと臨りん子このあきらめ徳とく終つひをあきらめ合あひあきらめ子こ
 多おほ量りょう云いふあきらめん。
 日ひ先せん生せいもあきらめまあきらめじあきらめ心こゝろをあきらめ離はなれあきらめばあきらめ披ひへあきらめずあきらめしあきらめぬあきらめとあきらめ花はな
 結むすぶあきらめもあきらめ六むく六むく世よ易やすくあきらめ事ことをあきらめ説とくあきらめん。
 □ 此こゝ所ところをあきらめ見みてあきらめ上あつあきらめてあきらめ居いるあきらめ三さん浦うら老らう者じゃ歸かへりあきらめて
 こゝろあきらめをあきらめ笑わらひあきらめをあきらめ合あひあきらめ子こがあきらめ。
 日ひ先せん生せいもあきらめ古ふるくあきらめまあきらめてあきらめ在あるあきらめ時ときとあきらめ醉すい漢げんがあきらめ身み段た
 しあきらめであきらめ舞まひあきらめをあきらめ上あつあきらめてあきらめ握にぎりあきらめ取とりあきらめてあきらめ儘ままのあきらめ月づき世よ界かい
 近ちかくあきらめすあきらめはあきらめ行いきあきらめ掛かけあきらめんあきらめとあきらめいあきらめふあきらめ話はなしはあきらめ有ありあきらめきあきらめをあきらめかあきらめ



三浦老人

何なにんあきらめぞあきらめ書かきあきらめりあきらめまあきらめすあきらめ。早はや速すみ試しみあきらめをあきらめ見みるあきらめやあきらめうあきらめのあきらめ山さんとあきらめ合あひあきらめ息いき
 小こ一いち郎らうはあきらめ云いふあきらめん。
 日ひイいカかンん〜、そあきらめんあきらめをあきらめ事ことをあきらめすあきらめまあきらめてあきらめはあきらめ私わががあきらめ困こらあきらめふあきらめとあきらめ
 公こう羽は標ひょうをあきらめ顛てんつあきらめれ。
 □ 屋や上じやうのあきらめ日ひ智ち障じやう甚しんくあきらめはあきらめヤやンんとあきらめ船ふねのあきらめ機きがあきらめ来きてあきらめ待まち
 てあきらめゐあきらめるあきらめ。運うん轉てん手てをあきらめ少せう年ねんはあきらめ。
 日ひここんあきらめふあきらめ小せう僧そう一いち臨りん行ぎやう機きがあきらめ操そう縦じゆう出でてあきらめ来きるあきらめゆあきらめめあきらめとあきらめ
 いあきらめああきらめ〜、公こう羽ははあきらめ心こゝろ怖おそいあきらめしあきらめれ。
 日ひ小せう年ねん機きをあきらめ離はなれあきらめばあきらめここのあきらめ身みをあきらめ〜、今いまはあきらめ先せん生せいのあきらめ鐘かねとあきらめ世よ説せつ
 誰たれもあきらめここのあきらめ世よをあきらめ〜、今いまはあきらめ先せん生せいのあきらめ鐘かねとあきらめ世よ説せつ
 誰たれもあきらめここのあきらめ世よをあきらめ〜、今いまはあきらめ先せん生せいのあきらめ鐘かねとあきらめ世よ説せつ

新

日 ちやア—— じようじよう——。これは愉快な何処を
 訪るののぬ。あんまり日なり過ぎて右陽へ幸して
 けちぎらだよ。降りる時は地球が他方へ回轉
 してきて、知るところの星の世界へでも降りてくるか
 ないかな。山と公明は洒落り、ツモリを云つて
 日 せんせい、それは事象です。現象は於て太陽を
 中心として行けり、よすか、唯空氣の關係上人の
 命が保たれぬのぞ……と山一郎は説明して掛つた。
 日 ちよ、これは機械で太陽を回るのぢや……
 日 け、日本式の機械は、動力が従来の
 とは根本的に違つて居り、力を動力と電力と

落ちた……不幸は絶体である。いふれ
 進行中の伴は、船の機を説明を申したる事
 成るる居り、片断を、片断を、片断を、片断を、片断を、
 下つて来しと、老三浦が云つた。
 日 では、さう安心して居るぢやないかと中央部
 へ公明は無つた。右の山一郎、左の海子、右の
 花枝、後で運轉手が乗つて来る。
 日 ちやア、行つて参りますよ。と花枝が云つた時
 へは、早や機は軽々と一直線に昇騰を始めぬ。
 滑走を要しないのだ。

ミツルギと念々名をなす。世ミタマの力は
 太陽の引力を強弱を吸収し又ミツルギの
 方は地球の引力を極度吸収する。それ
 を養育の結果は二つの鐘石を巧く用
 りて飛行的機原動力を充てて鐘石を
 安全に軌道の切方一つを機は太陽の
 引力に引かれ、急進度を経て何処か
 今即ちミタマの動力を發揮する。時
 下着し下降し、ミツルギの動力は

新

せんは旧動力に頼る。居りてせん
 日心と新動力を得る。鐘石は
 日左様です。其新動力は太陽自身の
 と地球自身の引力と、それを極度結
 日エツ山
 日心と新動力を得る。鐘石は
 のミツルギ。日本の其際山は二つの
 鐘石を養育する。今ミツルギは
 年をなす。鐘石は世界の何処にも
 日心と新動力を得る。鐘石は

今までの日録の昇騰し居るに於て
所謂空中道路と云ふは
降下を下降してと云ふは
此の如く行船の如く地球

乗合飛行船 空中賣店 上野日
丸坊主 教訓的公園 無音の如く操
大正初年回廊博覧會 西郷頼母の
頭の上 草へ 三階は其日昇降塔

十七

降は有りせん
此の運轉を既く
へと持はん

~~大降~~
~~降~~
~~降~~
~~降~~
~~降~~

揚子江へ入る。地球の引力で下へ
と降り出す。これより安全航路の如く
である。地球の引力の方向を能程緩めて有
りしめる。幾分古陽の方向に半斜した下
降ししめる。急轉直下の降上落は充分に防衛
され居ります。
可。それでは上と下とは巧く行ける。横行す。
可。地力と太陽力との平衡の餘波は、ゴロバ
ーを同轉せしめる。揚子江の横行は成る居ります。

~~Handwritten notes in red ink at the top of page 73.~~

音が鳥く響くやうな心づきで進まうとして居る。

 山と樹子夫人は話し掛けた。

 昔は船行機は音響が有りなつた。

 花枝嬢は無音の船行機の前身を語っている。

 3。

 何時も上野へは来たが、この朝は速力が遅い。

 船は下を瞰下し、さびしく問う。

 速力を止めては、一氣に築港山へ突き進む。

 控へてありきか、既に山下か上野です。

 上野へ一應の足見探さうか。中間は機を停止さう。

~~Handwritten notes in red ink at the top of page 74.~~

Handwritten characters in red ink at the top of page 74.

□ 船行機はまゝにして乗合客を乗せて定まる。

 船空路を角の隅まで。

 □ 船空路は、乗客の定まるまで。

 □ 船行機は大概三回人乗せり、中日は十

 人乗せり。

 □ それも機を動かす小形の人乗せり。

 □ それも機を動かす小形の人乗せり。

 □ これでは、開き煙花を打揚げり、あつた。

 □ 山と樹子は、初めて見た。

 □ 昔と違つて、茶動機やプロペラの

教訓的公園も面白いよ
 杉本を愛護せよ
 結果は好くも悲愴も
 有るの
 杉本を愛護せよ
 結果は好くも悲愴も
 有るの
 杉本を愛護せよ
 結果は好くも悲愴も
 有るの

杉本
 愛護
 せよ

杉本を愛護せよ
 結果は好くも悲愴も
 有るの
 杉本を愛護せよ
 結果は好くも悲愴も
 有るの
 杉本を愛護せよ
 結果は好くも悲愴も
 有るの

日 然るに目方合です。下り成り格
 別、事は時在り。低空飛行で一個して直
 ぐ成革の方へ進みます。子
 日 春村は其の不平等
 あり、今地の端を、大正九年回顧博覧會が
 開けて居ります。珍々山有る。百白
 い。子去は、その新して。
 日 せん、珍々山有る。珍々山有る。

日 せん、今日は先生のお供です。博覧會の方は又
 別、空飛行で上野を、一見して、箱は昔と、鏡と
 比較して、兄が、飾り、あり、過ぎ、みる、別の、地
 の、様、ふ、感、下、が、成、り、つ、れ。
 日 唯、西郷銅像の上を、飛、ん、で、時、々、は、如、り、も、可、き、な
 し、つ、れ。
 日 大、ア、成、革、人、行、き、ま、す、と、小、一、部、は、云、つ、て、事
 轉、今、の、その、意、を、傳、へ、れ。
 日 後、行、で、ま、す、を、直、ぐ、事、つ、れ。

日 然るに目方合です。下り成り格
 別、事は時在り。低空飛行で一個して直
 ぐ成革の方へ進みます。子
 日 春村は其の不平等
 あり、今地の端を、大正九年回顧博覧會が
 開けて居ります。珍々山有る。百白
 い。子去は、その新して。
 日 せん、珍々山有る。珍々山有る。

日 せん、今日は先生のお供です。博覧會の方は又
 別、空飛行で上野を、一見して、箱は昔と、鏡と
 比較して、兄が、飾り、あり、過ぎ、みる、別の、地
 の、様、ふ、感、下、が、成、り、つ、れ。
 日 唯、西郷銅像の上を、飛、ん、で、時、々、は、如、り、も、可、き、な
 し、つ、れ。
 日 大、ア、成、革、人、行、き、ま、す、と、小、一、部、は、云、つ、て、事
 轉、今、の、その、意、を、傳、へ、れ。
 日 後、行、で、ま、す、を、直、ぐ、事、つ、れ。

~~山田宗信~~

□ 耐えりぬぬ
 □ 忍んである
 □ 可慕
 □ 唯遺憾
 □ 見えあふ事である
 □ 嵩谷の頼政
 國寺の
 意く脱し
 見て其の
 用古

十六問四方の大本堂
 元禄五年
 三門
 五重塔

繪馬は油繪
 活動子實
 貴賓席
 徳正社

日計降台へ掛
 正と日計降台へ掛
 正と日計降台へ掛

~~目録~~

日計降台へ掛
 正と日計降台へ掛

一寸八分の本堂
 十六問四方の大本堂
 元禄五年
 今日
 傳

十字
 一
 一
 一
 一

繪馬は油繪
 活動子實
 貴賓席
 徳正社

日 偉人だー。
 日 珍客だー。
 日 三十年目で帰る人だー。
 日 人を今は一身の集めてある人だー。
 日 口を云つてある。子若の権は無作法であらう。
 日 唯、権を並べれば紳士的である。
 日 了り、望みのち、國、動、作、の、立、派、の、だー、士、着、板、で。
 日 偉人帰る！、珍客来る！、三十年振の新時代
 日 者、島浦の活動家、実と云ふのが、
 日 先生、これを見まわす。と、小一色は云つた。
 日 是非先生、これだけは見て参りませうと
 日 街の、動、め、れ。
 日 先生、さア入る。と、さういふと、花村は
 日 手をとつて、引張つた。
 日 日、ふ、ふ、ふ、と、さういふと、好意の、さ、さ、さ、と、
 日 日、甘、籠、入、つ、て、見、ん。
 日 日、それ、知、つ、て、籠、で、は、貴、賓、席、へ、通、つ、れ。
 日 日、見、物、は、皆、脱、帽、し、て、好、意、を、表、し、れ。
 日 日、番、組、を、強、く、繰、上、げ、て、珍、客、來、る、の、活、動、家、を

日 偉人だー。
 日 珍客だー。
 日 三十年目で帰る人だー。
 日 人を今は一身の集めてある人だー。
 日 口を云つてある。子若の権は無作法であらう。
 日 唯、権を並べれば紳士的である。
 日 了り、望みのち、國、動、作、の、立、派、の、だー、士、着、板、で。
 日 偉人帰る！、珍客来る！、三十年振の新時代
 日 者、島浦の活動家、実と云ふのが、

濱にせしめ

□それは活動写真と一寸見ればはあまのい
つより亀ヶ谷が第一機橋の善き群集を散らす
てはふれへ鳩浦翁がまて来る。三浦中助の花枝橋
の手を引いてまて来る。花束を贈呈する。千ヤンと

昨日の通りである。

□ あまの先をが……あまの喜が……山と花枝橋

は大喜びで

□ 活動写真と一寸見ればはあまのい

はあまのい

□ 世のりき功妙の假花路

□ 假花路へん

□ えッ假花路

□ 活動写真と一寸見ればはあまのい

□ のれく見せしめてまて……これは活動写真

□ のれく見せしめてまて……

□ 何んがあれが活きた人？……すまじ、あれは私で

□ はあまのい私の人間や、花枝橋は儘

□ の人間が如何して別々の世の中にあるの

□ のこの假花路は併し花枝橋の焚香の結果

治動字實は... 後... 紅葉狩... 一休... 團十郎... 明治の大名優... 精神の有...

十九

十六日... 一行... 新...

として... 焼... 日... 肖像... 無... 更... 儘... 日...

方は、大正五年、團十郎の方は同六年、十
 三回、心を期して、追善興行を行つて、大評判を
 有つた。その方へは、生高の養生子と
 梅幸があり、養生子と云ふは、六代目富五郎存び
 彦三郎あり。其藝術系統は、血統と云ふ正
 く、連続するものだが、團十郎の方では、娘二人
 で、養生子は有つた。それは、好人の藝術を傳へる
 べき、養生子としての、堀越と云ふ、その財産の
 管理を任つた。その有つた、いつの間、や
 り、その俳優と成る、追善興行の時、市川

新

三好と名乗つた。その時は、市川
 豊後、大入太右衛門、幸四郎、新橋、好
 評を有つた。……マサカ、十代目團十郎は、出
 来ては、ある。……と、公羽は、意味有り氣に
 云つた。……
 曰、天ツ十代目團十郎が、出た。……と、驚き、
 公羽は、貴賓席の傍に、腰を滑り落し、さう
 云ふ。……
 □ 劇の関し、……は、……を、……子、……代、……

日 日
 横本。注射の考へらぬ間に大抵へ
 注射する方が先きへ成功しれと見えぬもの
 日 日
 斯う成つて来ると芝居も相撲と同じ運命
 日 日
 手を取へるとれれ目()と五代目()
 郎との活動字案とは云ひまじい、芝居を見
 るよりいれまじい様ふ氣がしめて來れ既に
 うけ所を去りませうと云明は云つてを上げ

日 日
 随分先()は肉()である()と()
 は小一郎()顔を見合せ()
 日 日
 その肉()の()の()
 祝言を呼んで又()
 知()は()と()
 は()は()
 日 日
 それ()は()
 小一郎()は()

下 調子を更なる思ひ通り成る但し速力
 は、わざと遅くしてある。急用の塔各々は此
 行機があるのだから、歩行機で一時間何百
 哩と走らうとは、何ほあいのである。
 □ 既に公的の鐘を珍りに新發明で警かつたを
 るものゝけ、自動歩行機では、ビクとしし
 ない。
 句 ヤア吾妻橋の大きな鐘橋と成つたあア。
 東京では大鐘橋の元組で有つたが、兩國橋の
 加お替つたり、それの
 既橋、新大橋、永代橋、あどか

オートビード上の
の鐘の

□ 自動歩行機とは一種のスケート靴で有つ
 て、それを履くと人体の重量の機械で傳はつ
 て、発電して自然な歩り歩きをする。方向は侍
 は、自動歩行機を歩りきかす
 □ 自動歩行機を細めて、吾妻橋、
 今、は、三古橋、千原、以上のに、昭、潮、江、意、
 行、列、一、四、七、七、士、の、鐘、像、
 三〇
 句 おう、向島は面白く。ニカシ、此の機、
 は、自動歩行機、
 □ 自動歩行機、
 句 自動歩行機、
 句 自動歩行機、

日 4噸以上の船が隅田川を航行し成る
 のや。や、その東条釜尾と相持る河川
 擴張工事が行われ結果をみる橋の
 形式が旧式で成つたとは？
 橋下を通る時は、船の方で潜航
 する事は成り兼ねる...
 日 成程と云
 日 話さるが自動歩行機で吾妻橋を降り向
 けの工事へと着いた。
 日 やア意外！意外！と着いた。

あれで鉄橋と見えて
 其鉄以上の原料で
 造つたのを超鉄と
 する。超鉄橋は

新しく成つたのを見れば、橋を有
 つた。その信んぶ立流るの成つた。これは
 当然ながら、他の四方橋の向きの成つた。
 日 唯今では三十六橋存在する
 日 今ある橋の如く成つた。
 日 大概皆中央部の迴轉式で成つて居りま
 す。それで無くと4噸以上の船が通る事を
 んでしれぬ...既に併し今も式を成りま
 して、迴轉する必要が無く成り兼ねる。

□ 馴らぬ 空行機で 輪では いけぬと 翁の
 今を 取つて みるに 花枝 鎌が
 日 老いし 何の 意の 為に 在りし 山と 問 傳け

日 何と云ふ 樹がある。 工場の 両側は 樹場が
 並立して いる。 上野の 森林で 一人 坊主 して 了
 つんの 心も 其前 俗化 したと みる 向 下 した 中
 樹 立か 一本 ありし くと 諱め 居つた のよ べ
 樹の 心 感じ 山と 相付 暗 鬱 した
 日 山 麓の 工場 俗 要 山 麓 谷を 取 拂

つて 元の 水田は 直し 無遠慮 なる 庵 告 着 板 亦
 人の 取 拂 して 茶 店も 茅 葺を 規 定 本 の 柱
 井 藤 簾 張 花 壇 竹 簾 と なる 言 問 園 子
 や 樹 餅も 昔の 通り 賣つて 居り ます 山 と 小 一 郎が

説明
 日 感心 した
 日 上野 下 街 ありて 市 での け 通り 以 所は 復 古
 さ せ 予 しの 廣 重 や 其 他 の 錦 繪 を 参 考 日 復 古
 日 却て 骨 だ 折れ ぬ こと はず
 日 是れ では 花 取 りの 日 昔の 様 子
 西 京 草 子 酒 樽

~~後古不新~~

を擔ぐつ手袋で鉢巻はちまきをしてたり或は目録めいよのあん
と附つける花見客はなみきゃくが大勢出掛いける相成あひなるはずずと
て

日 せんお者は一人も居いないやせん。一度いちど昔むかしの花
見みの刑工けいこうかといふ儲花たくはな外ぐわい列れつが有ありきりたが餘あまり

習なりてせんて
て
すもとんか風かぜして花はなを見るのわ

コ 古短尺こたんしゃくは詩歌しこう俳諧はいかいを調しらべとそれを採とり
取とりて佐さとりて了り。隅田川すみがはを曲まげの宴えんを試こし
みれ人も有ありきりやと。とうと汽船きせんが替か航かうして

来きたものを
司し ちんた
困こんた
困こんた

公こう翁おうの一行いっけいは向嶋むかしまを一見いちけんし、そのが、本所ほんじよ深川ふかがわ
の工業地こうぎょうちを巡覽めぐらんして、あゝ船ふね行ゆき接せつ舞まうと三浦みづら

卯うへ帰かへり中ちゆう食じきを〜れ
□ 出先でさききで食じき事をしするのを餘あまりの人の喜よろこばは

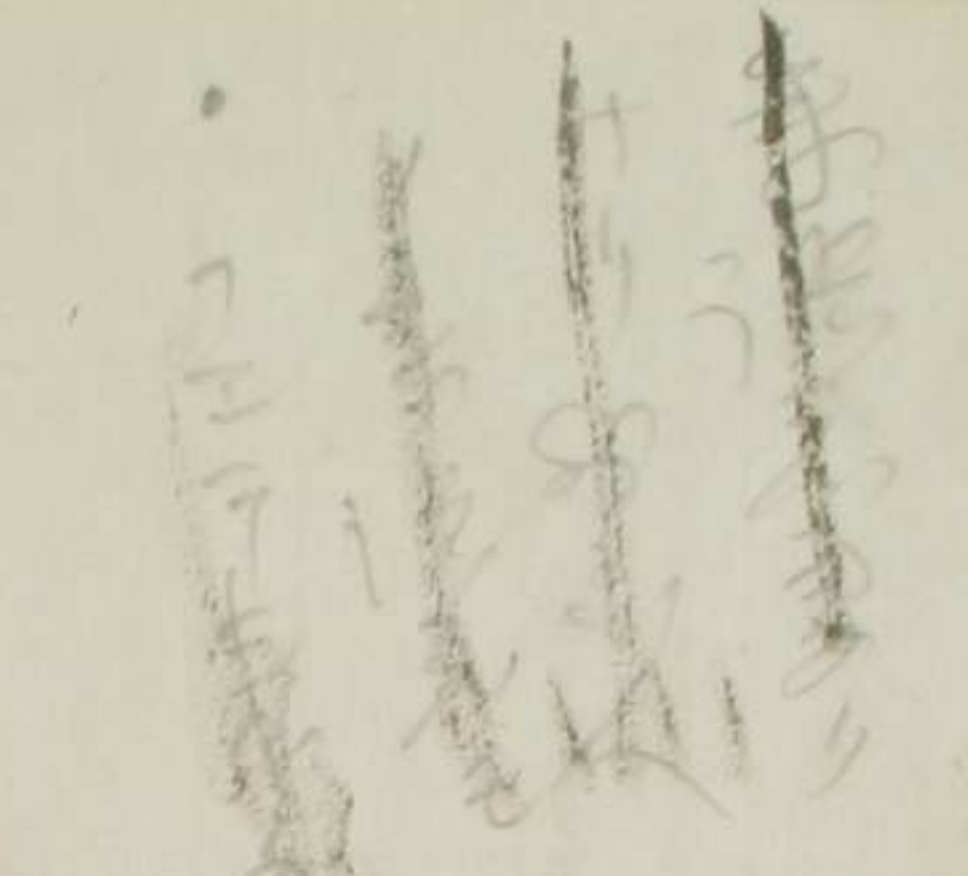
く感あつてあゝ何なに処どこをを行いつてあゝ短たん小せう問もん
下した情じやう定ていする事ことが、出でて来るくるので、大たい概がいの路ろ合がひで

は飲いん食じき店てんに〜い
□ 水みづ屋やは揃そろって一いっ堂だうの倉くら事ことするのを紳しん士しら〜き

□ 見物 一日を費して馬場公園は大分現在
 の東京が分つて来た
 □ 東京の理解 さんて来たは、日本の事と大体
 ！ 分つて分つて講である。けれど、手紙で未
 だ分らぬところは、三浦平助一家は当然
 お守符である。
 □ 往訪 東訪 翌日か、盛んに行けぬ。

4
 3
 2
 1
 一行

田指館三格太の建築
 館内は唐土野原
 杜能の館あり



□ 午後三浦中助夫婦と、竹井術の出来の要
 なる今朝、股栗の孫息子の、亦雄といふ、
 しが、代々、案内行、立つて、此行機で、芝公
 園、高輪泉山寺へと降、
 □ 宗教の草、相言、無語者が多、世中
 刑、外國人、
 □ 四十七士の銅像が建、とてある、と、俗語、
 □ パン、香りの、魚、つれ。

手紙
手紙

入口の緑門は万国旗あんどそんな装飾
 唯一の入口は職員が禮服で待たせてくれる
 三浦君はすべて一任してある
 私には必要は無いらぬけれどこれで済
 備は殆ど必要と不安なくお前は問掛り
 天、万事は手あがり無の様
 中物は差へれ

手紙
手紙

自分だけ長命と思つておれがそれ以上の
 日程は進んでいふ、三浦記念館は三萬人の
 午後五時よと案内状がしつと来るので、お前が
 三浦一家の人々とおれ様で舞んで見れ
 場所は芝浦増立地で、お前とオリンピック
 指場、有つて知ら、お前が洋傘の古建築
 不意、お前の回、お前を信じて見れ

行
行
行

主人と運転手との間、無線電信で合図を通
じる様子を成す。そのうち、自動車や馬車が
踏合つて怪音を呼ぶ。思ひなれ、あんまり苦
あまは片花をせん
云、それでさ、これ

□ 道のり、館内に入つて見てある。驚い
□ 野原へ出ると、思ひなれ、
□ 園、中央、川、池、
小川、橋、田、草、花、

の、藤棚、花房が長く垂下つてある。
思ひなれ、紅葉が輝いてある。春は、秋は、

□ 其、野原には多くの梅が置いてある。
子、は、花、は、花、は、花、

□ 何時、声、を、放つ。
□ 菊、は、吃驚、して、

少し、息、を、吐、き、
小山、が、式、場、を、用、い、る、

和田英作氏の筆で成つたものである。嘗身大で
 識し生けんが如く書の心をある。
 曰 ヤア、これは陰翳の年の私に於て時分は
 はあの着のつれ。六十一歳にツレを。今程白髪
 の髪を居る。腹も少く、腰も這る曲つて
 あらへ……時分一度せめては程身を著運
 つて見せいと思つた下知る下懐しれ。
 □ 然然、大正の肖像は一変つた。
 □ うち餘年の地味を流すは、五十年の女人と
 変つた。

曰 ヤ、これは如何なる。私のみか、此の時
 代で議會で大演説を試みたる藪野、権田は
 野次郎の演説を聞いた。頭下解して後、は
 を忘れた。唱を聞きしれ。と記念の心を
 取つた。いつをいつか、やがて能く書けるさ
 云つてある。問は又書けるは一変つた。
 曰 オヤ、これは何十年か。け時は最も腐爛
 した時分です。其如何なる。其の如何なる。
 〰~~~~〰~~~~〰~~~~三十代……二十代……学生時
 代……五〇……あつた。四十代……少年時代……
 新巻を閉つた。

曰 函内之根子で在ります

曰 あつた張りの...

曰 今出てる子今片背儀の頃

曰 片背儀を願つて居ります

曰 地が節のよお着いのて

曰 片背儀の...

曰 片背儀の...

曰 片背儀の...

曰 片背儀の...

曰 片背儀の...

早く貴翁も片背薬あさいまし

今日片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

片背持下候て非常

し易い事である。

日 三浦君、これだけの宴會、餘興が無いのは

物足りないのでせう。それより何か趣向の有

るのをお望み。と羽生君の質問に

日 それに、お望みは餘興は宴會の片手間で

在りしれつて、何れも、あれが其の妙を物をも

餘興有るが、二時間、三時間でも多忙な

方を早くお招きする事は、十分お氣の毒の

感無いです。有りません。それです、餘程面白

い物でもあれは在りますか、振り切つて、諸君よ、
落語とか、お義者、常盤津、長崎の類、手
品や喜劇や、西洋劇や、餘りな形、山路、過
ぎて話も面白い事、題多し、自然な流行
り、あつて、成つて、ひま、それより、金、あつて、
方、同士で、談話を、隨意に、交換する方が、
餘程、有益、且つ、愉快、なので、……
日 それ、何、感想、や、現、在、は、お、客、さん、エライ、と
日 併し、まあ、本日、の、餘興、で、無、い、餘興、と、して
……えへ、こゝろ、こゝろ、先、生、を、皆、を、腹、下、さ、さ、さ、

場内は鎮靜なれ。
 閣下並びに紳士淑女諸君！
 此道に顔面を三十年目に於て
 しんのは私とて大いなる光栄である。其の歡喜と耐
 えざる冷養で在ります。皆様は斯く少くもお
 ありの無きり。對しては私はいささかありませぬ。れ。
 左様外形な表現されたる。顔形に於てはへまぐ
 あり果して居ります。皆様を敬慕し遂に愛す
 るの情に於ては少しも憂つて居りませぬ。ツモリは
 在ります。大拍手併しお喜びを思ひます。

相手がぬと申す言はれ
 事實に表れて賢者の
 眞実の相手がぬ

ですが……先生の何旧式老人振を見てどの位
 お容赦は喜ぶの知れやせん。は……
 □ 公羽も仕方無いら。方張はたつね。
 □ 五時キツナリは向処を。鶏の音がしれ。
 □ それと同様。翁は中央の小山の上は空気が立

□ 三萬人一
 □ 門會！
 □ 静肅よし
 □ 水を打つ様

論り、皆様と云うの邊りて居る方も知れやせん。其
 知識は於ても其通りであります。これは私の方か
 后振りでもうして皆様の方が非常な、且つ非常な
 類々非常な知識を以てして結果として存して居る。
 どうの上は皆様の知識の力持振り、成つて居る強さ
 たる引力を以て、三十年間停滯して居る私の知識
 を一時は引上げ下ろさん事を熱心と致して居る
 歩在りや。(拍手) 是れが、今日初めてお目撃する
 方々、皆願ひ致して置きたい事がある。

是れは、如何の妙術を解、三十年間、世の進歩を

居るなりと云う、古くて新しき人達、則ち私
 と同様に配り人達、は、せんや追いつけは、い
 思ひやせん。(笑聲) 既に帰朝して今日で
 三月目になり、大分今の世の中が分つて来
 ます。モ一三ヶ月し、古くて新しき人
 達、は追いついて、同様に進んで世の中が皆様の
 思ひやせん、………知識、………人への笑聲
 本誌の著人、(一層笑聲加へる) 中、
 其れをい、(暫く笑聲止す) ……如何分宜
 しく指導する事、中、………願ひ致して

論り、皆様と云うの邊りて居る方も知れやせん。其
 知識は於ても其通りであります。これは私の方か
 后振りでもうして皆様の方が非常な、且つ非常な
 類々非常な知識を以てして結果として存して居る。
 どうの上は皆様の知識の力持振り、成つて居る強さ
 たる引力を以て、三十年間停滯して居る私の知識
 を一時は引上げ下ろさん事を熱心と致して居る
 歩在りや。(拍手) 是れが、今日初めてお目撃する
 方々、皆願ひ致して置きたい事がある。

是れは、如何の妙術を解、三十年間、世の進歩を

置きすす

□ 市川云ふつりを有つれり大拍子大鳴末

○ 起つるを好む機も翁休小山を降つれ

□ 續いて未定總代として總理大臣福徳圓満氏

が登壇しん

○ 諸君の同意を得て不肖なる私が書寫

○ 總代とて答詞を述べようと思ふ事と云ふ

○ 四重を見せしめ

○ 刑士の如く大拍子でそれを依頼しん

○ 本日は三十年目で帰朝するれ馬浦下郎右衛門の

時拍子で陽り新く此壯健なる為尊容を據する

事を得て一同光榮とし且つ又悦喜に耐えざる

泣着てありきす。翁は股薬をぬりて試みず

して猶且つ之のけの健康を保ち居る事

すのやまもつ更りて上は股薬をぬりて試み

るれひきもな。恐らく長壽を於ての新記録を

留めりし事と存下す。此意味に於ても慶

望の耐えをいので有りきす。(鳴末)公明の幸福

はそのゆゑに我々が種々研究を見て其

そのゆゑに成功を見せしめたる事と今日

公羽の死は今日世の中は生れぬものなり
 基督は復活せり。即ち 聖なる命を
 唱来し 其の命は命場である。此所は何であるか
 と云ひしや。公羽を記念する館に有りませぬ。公羽の
 徳を公へその功を後世に傳へる為、有志者が
 建請し 其の命は公羽の復活を豫期して有志
 者が 其の命は此所の魂めす。公羽の精神
 を永遠に留める為の墳墓の一種として見てみる
 れれのを有りませぬ。大唱来し 其の墳墓を公羽は
 斯うして見てみる。其所の命は生れぬ命

於て公羽は 既に見えぬものなり。あゝ世
 中、公羽の命は幸福なる命は有りませぬと有らば
 ず。その命は命場を成りませぬ。 (謹聴その声
 堂下満つ) 其の命は命場。人間に秘めて世に生
 れ出れ時、その産声を掲げん時の様子を自ら
 自身で知りぬ。……大唱来し 又人間に死ん
 でろつん後、先づ自分の葬式の様子をいれ
 い。大唱来し 其の命は命場。女道中會
 の見し。大唱来し 皆とて命場を相認で
 あ。その命は公羽の命は今日併せ見て居らぬ。

の心算の復讐を欣喜する状態は千載の後の
 備へべき道(2) 兼會(3) 悲しや集まる有様を想像
 し得るれぬでも無いと存(4) するすれは生か
 ずしんが縁をを、知覚し、其所(5) 人の
 妙味を覚(6) 了せられるが時は、世(7) 最(8) 幸(9) 福(10)
 の人であると同時に、巧(11) 術(12) 結(13) 隠(14) する事のよ
 奇(15) れ外(16) とは、又(17) その最(18) 巧(19) 術(20) 者(21) たるを縁(22) 化(23) 譯(24) せ
 ありやす、以(25) 一言(26) 片(27) 語(28) を好(29) んと申(30) 上げやす
 大(31) 拍(32) 子(33) 大(34) 鳴(35) 末(36) 日(37) 々々(38) 大(39) 隆(40) 動(41) 心(42) の(43) 拍(44) 子(45) 一(46) 感(47)
 心(48) 拍(49) 子(50) の拍(51) 子(52) を(53) 志(54) せ(55) る(56) 拍(57) 子(58) 一(59) 感(60)

